

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第152集

馬場Ⅱ遺跡・沖Ⅰ遺跡発掘調査報告書

国道4号金田一バイパス関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

馬場Ⅱ遺跡・沖Ⅰ遺跡発掘調査報告書

国道4号金田一バイパス関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600箇所及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発ともなう社会資本の充実も重要な施策であります。特に幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待される所であり、

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告の二戸市馬場Ⅱ遺跡・沖Ⅰ遺跡は、馬淵川左岸の段丘上に立地し、昭和63年と平成元年の発掘調査によって縄文時代の狩り場跡や中世の集落跡が発見されました。ひき続き出土資料の整理をすすめ、ここに報告書として発刊するはこびとなりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまで発掘調査及び報告書作成にご協力、ご援助を賜りました建設省東北地方建設局岩手工事事務所、二戸市教育委員会をはじめ関係各位に衷心より謝意を表します。

平成2年5月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 中村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県二戸市金田一字沖 6-3 ほか¹に所在する馬場II遺跡、および同市金田一字沖 42-3 ほか²に所在する沖 I 遺跡の調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、国道 4 号金田一バイパス建設に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と建設省東北地方建設局岩手工事事務所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡台帳の遺跡番号は馬場II遺跡が IF80-1007、沖 I 遺跡が IF80-1018、調査略号は各々 BBII-88・BBII-89、OI-88・OI-89 である。
4. 発掘調査は、昭和 63 年度と平成元年度の 2 年度にわたって実施した。各々の調査期間および調査面積は、次のとおりである。

馬場II遺跡

昭和 63 年度 5 月 9 日～6 月 30 日 1,200 m²

平成元年度 8 月 25 日～9 月 9 日 870 m²

沖 I 遺跡

昭和 63 年度 5 月 9 日～6 月 30 日 800 m²

平成元年度 8 月 25 日～10 月 27 日 1,300 m²

5. 調査担当者は、次のとおりである。
昭和 63 年度 工藤利幸、佐瀬 隆
平成元年度 佐瀬 隆、高橋義介、平井 進、佐々木信一
6. 報告書の作成は佐瀬 隆が担当した。
7. 分析・鑑定は、次の方々に依頼した（敬称略）。
(1)種子同定 バリノ・サーヴェイ株式会社
(2)動物遺存体同定 佐藤正彦（陸前高田市立博物館）
熊谷 賢（東北学院大学）
(3)石質鑑定 佐藤二郎（佐藤地質工学研究所）
8. 調査に際しては、二戸市教育委員会関 豊氏のご協力をいただいた。
9. 調査に関わる諸記録、遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序

例言

〈本 文〉

I 調査に至る経過	1	2. 遺物	37
II 遺跡の位置・地形・地質	3	(1)馬場II遺跡の遺物	37
III 調査の方法と整理	7	(2)沖I遺跡の遺物	39
1. 調査区の設定		V 考察とまとめ	42
2. 遺構と精査の方法		1. 馬場II遺跡	42
3. 図および図版		2. 沖I遺跡	43
4. 土層		付編1 沖I遺跡出土動物遺存体について	45
IV 遺構と遺物	13	付編2 沖I遺跡出土種子同定	50
1. 遺構	13	付編3 沖I遺跡炉跡残渣の植物珪酸体、 灰像分析	57
(1)馬場II遺跡の遺構	13		
(2)沖I遺跡の遺構	19		

〈図 版〉

図1 遺跡の位置	2	図11 沖I遺跡遺構配置図	11
図2 馬場II遺跡表層地質断面(AB)	4	図12 P I 001陥し穴状遺構	13
図3 沖I遺跡表層地質断面(AB)	4	図13 P II 001陥し穴状遺構	15
図4 沖I遺跡表層地質断面(EF)	4	図14 P II 002陥し穴状遺構	15
図5 沖I遺跡表層地質断面(CD)	5	図15 Q II 001陥し穴状遺構	16
図6 馬場II遺跡・沖I遺跡表層地質模 式柱状図	5	図16 Q II 002陥し穴状遺構	17
図7 馬場II遺跡における段丘構成層 上面の高度分布	5	図17 S I 001陥し穴状遺構	18
図8 沖I遺跡における段丘構成層上面 の高度分布	5	図18 Q I 001土坑	18
図9 土層凡例	8	図19 B III 01住居跡	20
図10 馬場II遺跡遺構配置図	9	図20 C III 01住居跡	21
		図21 C II 01住居跡	22
		図22 C II 02住居跡	23
		図23 B III 02獨立柱建物跡	24

図24	BII01住居跡状遺構	25
図25	CII03住居跡状遺構	26
図26	DII01住居跡状遺構	27
図27	DII02住居跡状遺構	28
図28	BIII004陥し穴状遺構	28
図29	BIII005陥し穴状遺構	29
図30	BIII003井戸跡	29
図31	CIII005井戸跡	30
図32	CHII009井戸跡	30
図33	BII001土坑	31
図34	CIII003・004土坑(灰溜)	31
図35	CII001土坑	32
図36	CIII001土坑	32
図37	BIII001土坑	33
図38	BIII006土坑	33
図39	BIII002土坑	33
図40	CIII006土坑	33

図41	CIII007a・b土坑	34
図42	CIII008土坑	34
図43	DIII001土坑	34
図44	DIII002土坑	35
図45	DIII003・004土坑	35
図46	CII002土坑	35
図47	DII001土坑	36
図48	CIII002焼土	36
図49	DI001溝跡・EI001溝跡	36
図50	馬場II遺跡出土遺物	38
図51	沖I遺跡出土遺物(1)	39
図52	沖I遺跡出土遺物(2)	40
図53	陥し穴状遺構の立地と形態の 関係	43
図54	陥し穴状遺構の形態変化と土層の 関係	43

〈写真図版〉

図版1	調査区空中写真	65
図版2	沖I遺跡・土層断面	66
図版3	馬場II遺跡・土層断面、陥し穴 状遺構	67
図版4	馬場II遺跡・陥し穴状遺構	68
図版5	馬場II遺跡・陥し穴状遺構、土 坑	69
図版6	馬場II遺跡・陥し穴状遺構	70
図版7	沖I遺跡・住居跡	71
図版8	沖I遺跡・住居跡	72
図版9	沖I遺跡・住居跡	73
図版10	沖I遺跡・住居跡	74

図版11	沖I遺跡・掘立柱建物跡・住居 跡状遺構	75
図版12	沖I遺跡・住居跡状遺構、土坑	76
図版13	沖I遺跡・住居跡状遺構	77
図版14	沖I遺跡・住居跡状遺構、土坑	78
図版15	沖I遺跡・陥し穴状遺構、土坑	79
図版16	沖I遺跡・井戸跡、土坑	80
図版17	沖I遺跡・井戸跡、土坑	81
図版18	沖I遺跡・土坑	82
図版19	沖I遺跡・溝跡	83
図版20	馬場II遺跡・遺物	84
図版21	沖I遺跡・遺物	85

I 調査に至る経過

二戸市金田一字上田面から同市金田一字段ノ越に至る総延長3.2kmの一般国道4号金田一バイパスの建設は、昭和50年に計画着手され、平成5年に完了の予定である。

この間に所在する埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、昭和53年から建設省東北地方建設局岩手工事事務所と岩手県教育委員会との間で事前協議が行われた。岩手県教育委員会は建設予定地内の遺跡分布調査を実施し、上田面Ⅲ、上田面Ⅱ、荒田Ⅲ、荒田Ⅳ、八ッ長Ⅱ、沖Ⅰ、馬場Ⅱ、馬場、駒焼場、府金橋の10遺跡を確認し、工事計画に沿って発掘調査を実施することとした。すでに府金橋遺跡は昭和56・57年に、駒焼場遺跡は昭和61・62年に、馬場遺跡は昭和62・63年にそれぞれ発掘調査を実施し、調査報告書を発刊している。

沖Ⅰ・馬場Ⅱ遺跡については、昭和57年から岩手工事事務所と岩手県教育委員会との間で現地確認調査を含む協議が行われた。その間の経過は、以下のとおりである。

- 昭和57年10月25日付け 建東岩二工第126号 岩手工事事務所長から岩手県教育長あて
埋蔵文化財包蔵地の分布調査について依頼
- 昭和58年10月19～21日 岩手県教育委員会による現地調査の実施
- 昭和58年10月23日付け 教文第262号 岩手県教育長から岩手工事事務所長あて
金田一バイパス建設工事に係る遺跡分布調査の結果について回答
- 昭和62年8月24日付け 教文第289号 岩手県教育長から岩手工事事務所長あて
昭和63年度における埋蔵文化財に関連する土木事業等の照会
- 昭和62年9月10日付け 建東岩二工第78号 岩手工事事務所長から岩手県教育長あて
金田一バイパス建設工事の2遺跡について回答
- 昭和62年12月9日 岩手工事事務所、岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団の協議

これにより、岩手県教育委員会は沖Ⅰ遺跡1,200㎡、馬場Ⅱ遺跡1,200㎡の調査を昭和63年度の岩手県文化振興事業団の受託事業とし、当埋蔵文化財センターが昭和63年5月9日付け委託契約により調査に着手することとなった。しかし、沖Ⅰ遺跡の400㎡については民家移転の遅延等があり、協議の結果次年度に継続調査することとした。さらに、

- 昭和63年9月9日付け 教文第320号 岩手県教育長から岩手工事事務所長あて
昭和64年度における埋蔵文化財に関連する土木事業等の照会
- 昭和63年10月13日付け 建東岩二工第68号 岩手工事事務所長から岩手県教育長あて

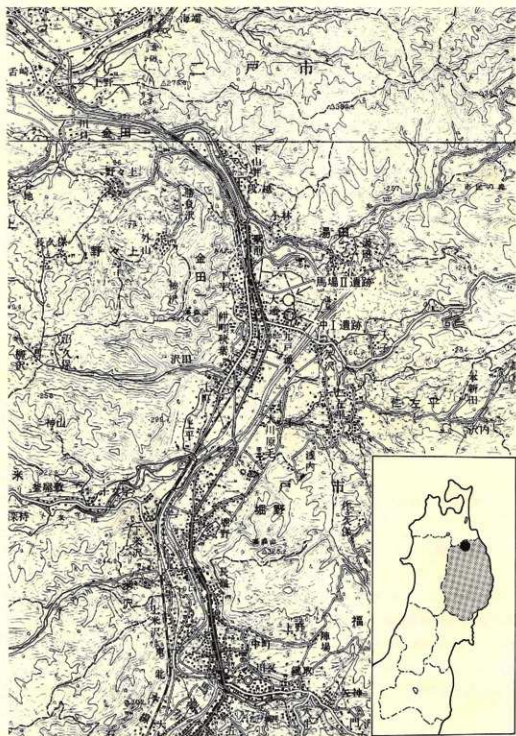


图1 遺跡位置圖(1:50,000 三戸・一戸)

金田バイパス建設工事の2遺跡について回答

平成元年1月31日の三者協議を経て、委託事業となった沖I遺跡1,300㎡、馬場II遺跡870㎡について、当埋蔵文化財センターが同年8月16日付け契約により調査を実施したものである。

II 遺跡の位置と立地

馬場II遺跡、沖I遺跡は北緯40°18'45"東経141°18'50"付近に位置し、東日本旅客鉄道東北本線金田温泉駅から東南東へそれぞれ約0.7km、約1.0kmの距離にある(図1、図版1)。両遺跡は、北流する馬淵川の左岸に形成された標高85~86m、河床面との比高12mほどの河岸段丘上に立地する。この段丘の北縁は、明瞭な崖で下位面と境しているが、東進するにつれ不明瞭となり、緩斜面へ移行する。

当地域の段丘面は、上位より仁佐平、福岡、長嶺、中町、堀野、仲曾根の各段丘に区分されている(松山、1978)。馬場II、沖Iの遺跡をのせる段丘は、南部浮石(Nb-P)以上のテフラ層で被覆されることから堀野面に相当するであろう(図2・3・4・5、図版2・3)。

図6は、馬場II遺跡および沖I遺跡の調査区内で得られた表層地質調査によって求められた模式柱状図である。段丘の構成層は下部の円礫層と上部の砂・シルト層からなる。その上位に南部浮石以上の十和田火山起源のテフラが黒色腐植層(土壌層位A層)を介させながら累積している。

南部浮石は約50cmの層厚で直接段丘構成層を覆い、下位に褐色風化火山灰層(いわゆるローム層)を全く伴わない。このことは、南部浮石の降下堆積直前に段丘の離水が生じたことを示すものである。南部浮石の年代として約9,000年前(大池・高橋 1970)が得られていることから、この現象は完新世初期、縄文時代早期の出来事であったと推定される。

図7・8は、深堀、トレンチ掘調査および検土杖を用いて得た段丘構成層上面の深度値にもとづき段丘面の高度分布を求めたものである。これは、南部浮石堆積直前当時すなわち約9,000年前の地表の起伏を示すと考えられる。馬場II遺跡では、調査区北東部で3°程度の傾斜域が認められる。沖I遺跡では、調査区中央部にほぼ南北方向に微高地が分布し、その東南東側は約6°で傾斜している。この段丘構成層上面の起伏は、離水前の河川営力で形成されたもので、南部浮石により一気に埋没保存された「化石氾濫原」の性格を有するものと思われる。これらの起伏は現地表にも反映されているが、テフラの被覆やその2次堆積や土壌生成作用、最近の土地改変等により不明瞭である。しかし、被覆テフラ層、特に南部浮石の風化過程を少なからず支配し、関係するテフラ層を掘り込んでつくられた遺構の形態に影響を与えている(V章参照)。

離水後は、テフラの堆積と平行してそれを母材とする火山灰土壌・黒ボク土が生成した。十和田火山の噴火活動は、数千年の間隔をおいて間欠的に繰返され、約9,000年前に南部浮石(Nb-P)、約5000年前に中叡浮石(Cu-P)、約2,000年前に十和田b降下火山灰(To-b)、約1,000年前に十和田a降下火山灰が堆積した。活動の休止期間は活動に比較してはるかに長く、この

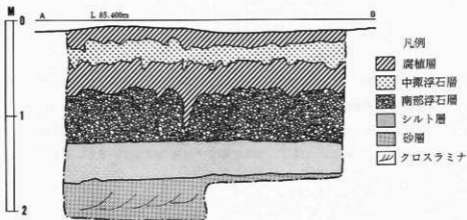


図2 馬場II遺跡表層地質断面 (AB)*

*遺構配置図に位置明記

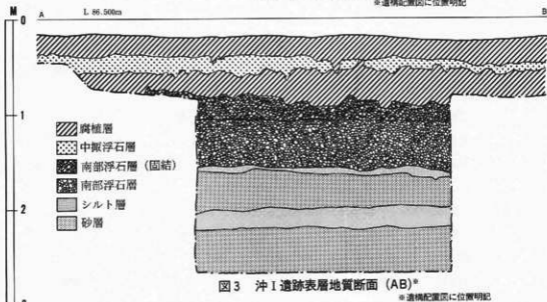


図3 沖I遺跡表層地質断面 (AB)*

*遺構配置図に位置明記

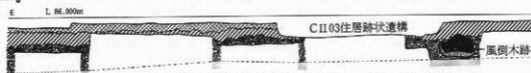


図4 沖I遺跡表層地質断面 (EF)*

*遺構配置図に位置明記

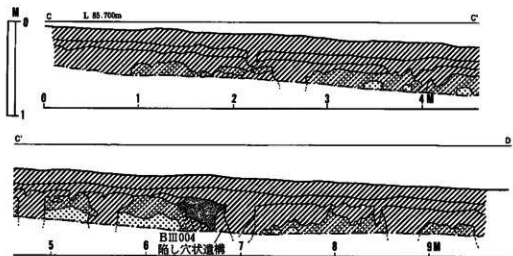


図5 沖I遺跡表層地質断面 (CD)*

*遺構記号圈に位置明記

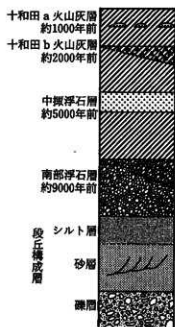


図6 馬場II遺跡・沖I遺跡表層地質模式柱状図

土壌層位学的区分

I	--- A ---
II	A
	AC
III	A
	C
	A
IV	C ₁
	C ₂
	C ₁
V	C ₂
	C ₁

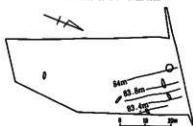


図7 馬場II遺跡における段丘構成層上面 (9000年前の地表面) の高度分布

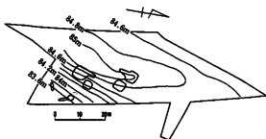
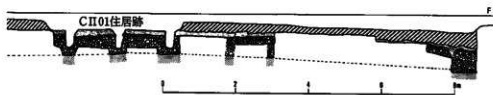


図8 沖I遺跡における段丘構成層上面 (約9000年前の地表面) の高度分布



間植被の存在のもとで2次テフラ、風成塵が少しづつ堆積しつつ黒色腐植層を伴う火山灰土壌の生成が進んだ。このような母材（テフラ）の急速な堆積による土壌生成の中断と母材の堆積休止期、緩慢期における土壌化が繰返された結果、テフラ層と黒色腐植層が互層する火山灰土断面が形成されたものである。

母材の堆積サイクルにローマ数字の番号をつけて、各サイクルを区別し、それぞれのサイクル内における土壌層位と組合せて土壌断面を認識する土壌層位学的区分（加藤、1971）に従い、馬場Ⅱ遺跡、沖Ⅰ遺跡調査区内の表層地質を土壌層位学的単位に区分すれば図6のようになる。Ⅰ、Ⅱの各サイクルは、それぞれを面するテフラ層すなわち十和田a降下火山灰、十和田b降下火山灰の層厚が薄く、かつ連続性に乏しいため、実際の断面では独立したサイクルとして明瞭に識別できない場合がある。なお、前記した沖Ⅰ遺跡調査区南東部の傾斜域では、南部浮石層の間にシルト層が介在するのが確認される。このシルト層は離水後に生じた洪水時の冠水によって形成されたものと推定される。当シルト層が関わる土壌層位学的単位は図6では独立した単位として明示していない。

以下に各土層について記載する。（土性は、野外土性判定基準（ペトロジスト懇談会、1984）による）

ⅠA層：耕作土。腐植に富む黒褐色土（10 YR2/2）。疎で土性はSL。

ⅠC層：浅黄色の十和田a降下火山灰。（2.5 Y7/3）。

ⅡA層：腐植にすこぶる富む黒色土（10 YR2/1）。やや密で土性はSL。白色軽石粒子を含む。

ⅡAC層：十和田b降下火山灰。密で土性はS。腐植にすこぶる富む黒色土（10 YR1.75/1）を基質とする。密。

ⅢA層：腐植にすこぶる富む黒色土（10 YR1.85/1）。密で土性はCL。

ⅢC層：中礫浮石。粒径3mm前後の黄褐色（10 YR8/7）浮石。上部に弱固結の火山砂（10 YR4/4）が認められることがある。

ⅣA層：腐植にすこぶる富む黒色土（10 YR1.7/1）。土性はCL、密。黄褐色軽石粒子を含む。

ⅣC₁層：南部浮石の2次堆積層。段丘構成層上面が窪んでいるところに発達する。固くしまりきわめて密。黄褐色（10 YR4.5/6）。

ⅣC₂層：南部浮石。層厚50cm前後の黄褐色（10 YR5/6）軽石層。平均粒径は約3cm。

ⅤC₁層：段丘構成層最上位のシルト層。褐色（10 YR4/6）。

ⅤC₂層：段丘構成層中位の砂層。褐色（7.5 YR4/6）。クロスラミナが不明瞭にみられる。

ⅤC₃層：段丘構成層下位の礫層。平均径5cm前後の円礫からなる。

III 調査の方法と整理

1. 調査区の設定

<馬場II遺跡>(図10)

調査区は、北側に隣接する馬場遺跡の調査区を延長して設定した。建設省岩手工事事務所の設置した中心杭を結ぶ直線を基準線とし、これに直交する直線によって20×16mの大調査区を設けた。次に大調査を4×4mに細分して小調査区とした。

基準線の西側をI、東側をIIとし、また、各杭より基準線に直交する直線によって画される各部を北よりP、Q、R、Sとして、両者の組合せで大調査区を例えばPI、PIIのように呼び、小調査区は各大調査区と同様に北西端から順にアルファベットを与えた。各小調査区はPIa、OIIbのように呼称した。

なお、基準線は真北に対して西へ約25'偏している。

<沖I遺跡>(図11)

調査域の傾斜方向にほぼそって建設省岩手工事事務所の設置した中心杭No.76を通る直線を設け、この線に直交する杭No.76を通る線を基準線と定めた。この基準線および最初に設けた線を、杭No.76を基点として両方向へ20m間隔で分割して、一辺20mの大調査区を設定した。さらに各大調査区は4m四方の小調査区に区画した。

基準線に直交する方向に、また基準線にそって、大区画線により画される区画に対して、それぞれ西から順にI、II、IIIを、南から順にA、B、C、D、Eを与えた。大調査区は両者を組合せてAI、BIIのように呼称した。小調査区へは南西端から基準線に平行に小文字アルファベットを順に与えている。したがって、各小調査区はAIa、BIIb、のように呼称した。

なお、基準線上に設けられた2つの基点の第10系の座標値(X、Y)および標高(H)は次のとおりである。

基点1 X=34779.058 Y=40856.982 H=86.530

基点2 X=34816.197 Y=40871.823 H=86.214

この値より基準線は真北に対して東へ約21'偏している。

2. 遺構の名称と精査の方法

検出された遺構を大きく住居跡(住居跡状遺構を含む)とその他の遺構(陥し穴状、井戸跡、溝跡、土坑、焼土)に大別した。各遺構を大調査区名と通し番号(前者は2桁、後者は3桁)を組合せ、たとえばCII01、BIII005などと呼称した。

精査は住居跡については4分法、その他の遺構については2分法を基本とした。

3. 図版・写真図版

図版の縮尺はスケールで示している。写真図版の縮尺は、遺物については各図版に明示し、遺構については不定である。

各遺構図においては、遺構が掘り込まれている土層をできるだけ表現するように努めた。各土層の表現は、図 11 に示した凡例に準じている。2/2 以下の土色を呈する黒色の埋土や、テフラ層の崩壊に由来する埋土についても共通した表現法を採用している。

4. 土層

土層は図 6 に示した土壤層位学的区分に従い「IA 層」「III C 層」などと表記する。なお、サイクルの基本層（テフラ層）が不明瞭な場合は、下位サイクルと統合して「I・II A 層」のように表現した。

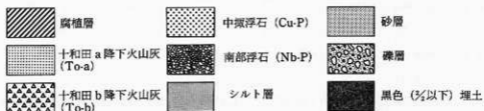


図 9 土層凡例



- 1 PI01陥し穴
- 2 QI01土坑
- 3 PII01陥し穴
- 4 PII02陥し穴
- 5 QII02陥し穴
- 6 QII01陥し穴
- 7 SI01陥し穴

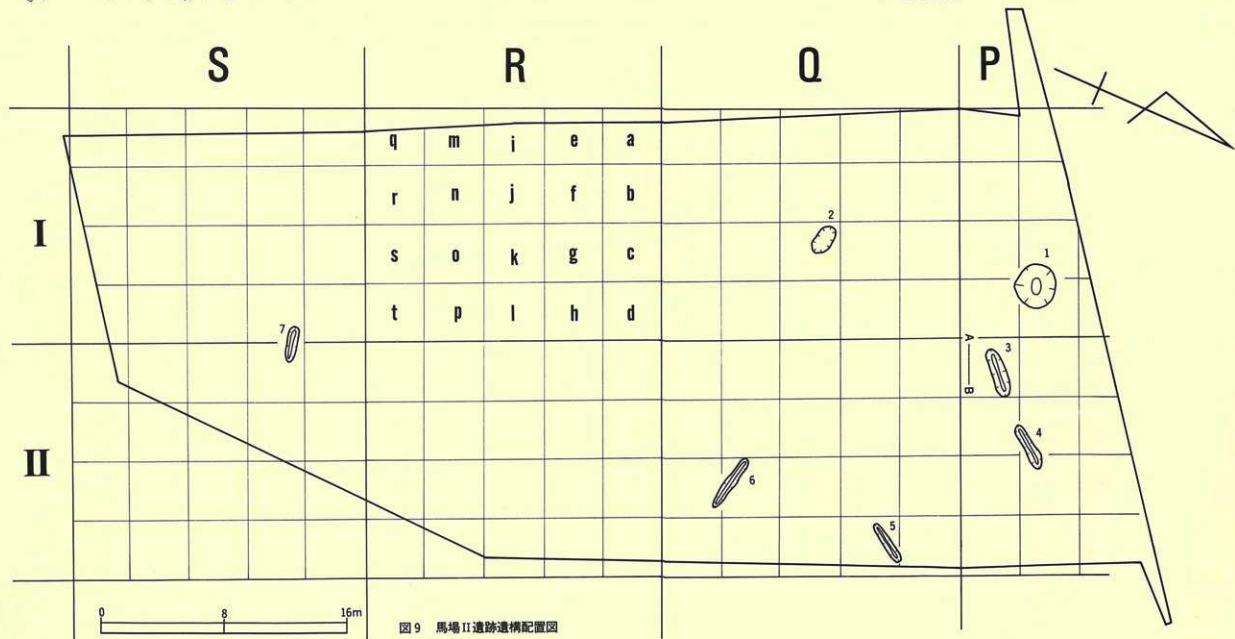


図9 馬場II遺跡遺構配置図

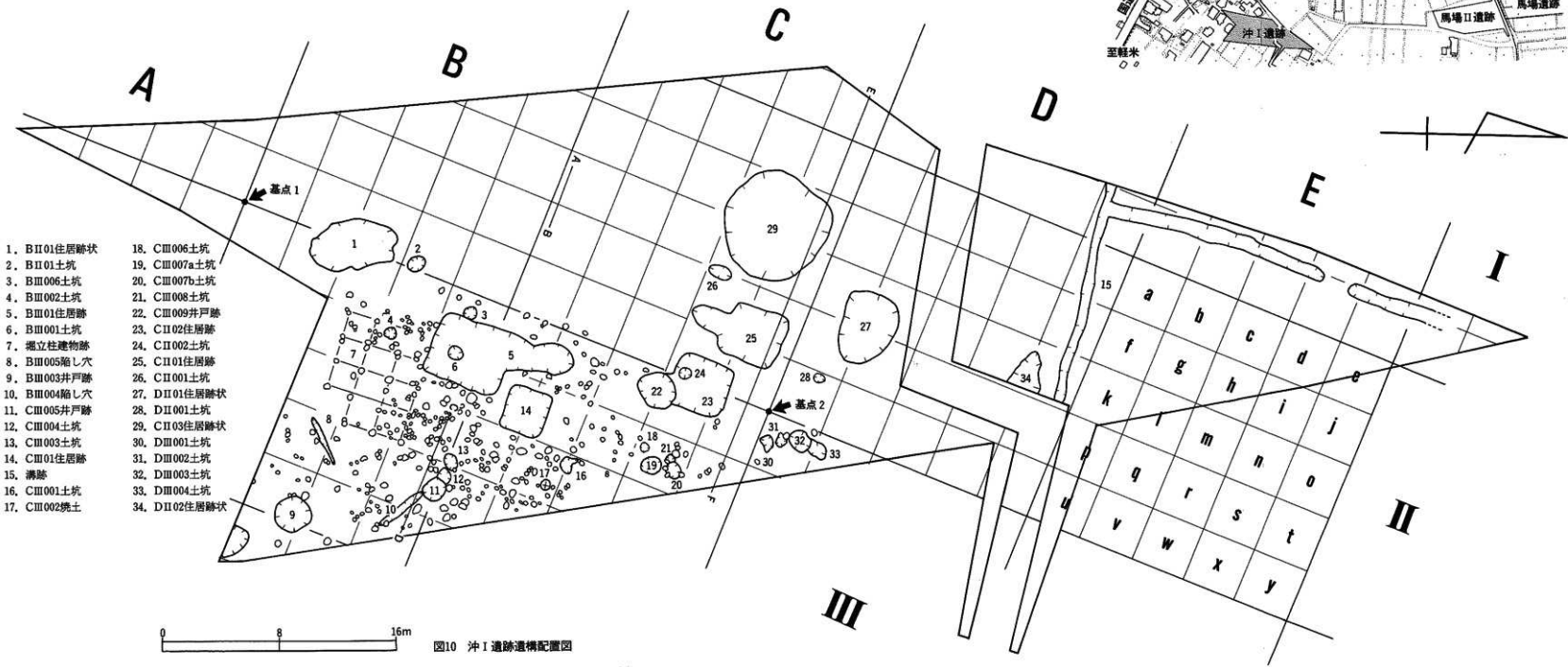


図10 沖I遺跡遺構配置図

IV 遺構と遺物

1. 遺構

(1) 馬場II遺跡の遺構

陥し穴状遺構5基、土坑1基が確認された。前者は、形態、埋土状況および検出面のちがいで、により少なくとも2期に分けられる。

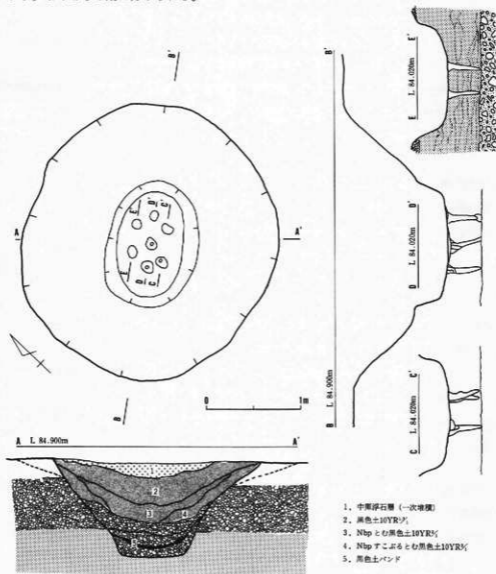


図12 PI001陥し穴状遺構

PI001 陥し穴状遺構 (図 12、図版 4)

本遺構は、PIo・p・s・t区に位置し、検出面は、南部浮石の腐植層 (VA 層) である。

平面形は、上端が 288×264 cm でほぼ円形、下端が 108×68 cm の楕円形を呈する。深さは中央付近で 100 cm を測る。底面は水平で平坦である。壁は外傾して立ち上がるが、下端から上位 20 cm 付近でさらに外傾し、断面形は摺鉢状を呈している。

底面からは、7 基の杭理設跡が検出された。1 基は底面中央に位置し、他の 6 基はそれを取り囲むように 20 cm 間隔で配列する。上端の直径は 10 cm 前後であり、3 基には直径約 2 cm の腐植土のつまった逆茂木の杭跡が上部 10 cm ほどに認められた。埋設跡は細くなって礫層 (VC₂ 層) まで達している。下部では南部浮石の粒子をふくむシルト質砂土であり、礫層との接触部分では青灰色を帯びており、地下水の影響を受けているものと推定される。

埋土は、南部浮石層 (NC 層) とその腐植層 (VA 層) の崩壊物からなる中・下部と中礫浮石の一次堆積層 (III C 層) からなる上部に大別される。埋土状況から、中礫浮石の降下堆積直前に構築されたものと推定される。

PII001 陥し穴状遺構 (図 13、図版 5)

本遺構は PIIq 区に位置する。検出面は南部浮石の腐植層 (VA 層) である。

上端は不整な長楕円形、下端は細長い隅丸の長方形を呈する。底面はほぼ平坦である。短軸方向の断面は、ロート状～Y 字状であるが、これは中上位の壁面を構成する南部浮石 (NC 層) およびその腐植層 (VA 層) の崩壊によって遺構上部が拡張したためと考えられ、本来は V 字状であった可能性が大きい。

規模は、上端長軸 354 cm・同短軸 98 cm、下端長軸 330 cm、同短軸 16 cm、中央付近の深さは 124 cm である。長軸方向は、N-45-E である。

埋土は、南部浮石層 (NC 層) の崩壊物と黒色腐植土が互層する中・下部と中礫浮石の粒子にとむ黒色腐植層からなる上部に大別される。一次堆積のテフラ層は認められない。

埋土状況から当遺構が構築されたのは、中礫浮石の腐植層 (III A 層) の生成期と推定される。遺物は出土していない。

PII002 陥し穴状遺構 (図 14、図版 6)

本遺構は PII n・o・r 区にまたがって位置する。検出面は中礫浮石 (III C 層) である。

平面形は、上端が長楕円形、下端が細長い隅丸の長方形を呈する。短軸方向の断面はピベット状を示すが、これは壁面の一部を構成する南部浮石の崩壊によって変形したためと考えられ、本来は V 字状あるいは U 字状であったと推定される。

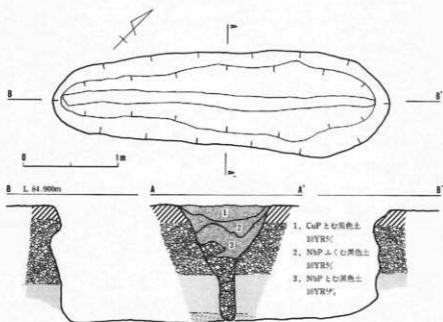


図13 P II 001陥し穴状遺構

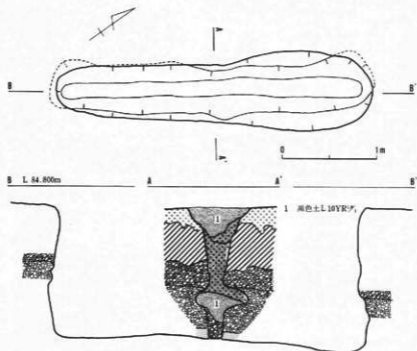


図14 P II 002陥し穴状遺構

規模は、上端長軸 334 cm・同短軸 60 cm、下端長軸 322 cm、同短軸 16 cm、中央付近の深さ 140 cm である。埋土は、南部浮石層の崩壊物からなる下部と中環浮石層の崩壊物を主とする上部に大分され、両者は黒色腐植質土で画される。

埋土状況から中環浮石の腐植層（ⅢA 層）の生成期に構築されたものと推定される。遺物は出土していない。

QII001 陥し穴状遺構（図 15、図版 5）

本遺構は QII o・s 区に位置する。検出面は南部浮石の二次堆積層（ⅣC₁層）である。

平面形は上端が不整な長楕円形、下端が細長い隅丸長方形を呈する。短軸方向の断面はピペット状を示すが、本来はV字状あるいはU字状であったと推定される。このような形状の形成には、南部浮石の固結した二次堆積層（ⅣC₁層）の存在が関わっていると思われる。

規模は、上端長軸 422 cm・同短軸 72 cm、下端長軸 430 cm・同短軸 20 cm、中央付近の深さ 124 cm である。底面は中央付近から西端に向かって少し傾斜して浅くなる。長軸の方向はほぼ東西である。

埋土は、南部浮石層の崩壊物からなる下部と中環浮石の崩壊物を主体とする上部に大別される。一次堆積のテフラ層は認められない。

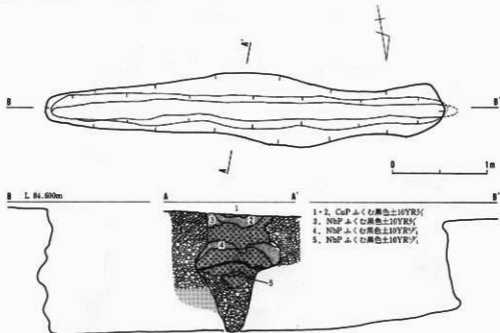


図15 QII001陥し穴状遺構

埋土状況から当遺構の構築時期は、中礫浮石の腐植層（ⅢA層）の生成期と推定される。
遺物は出土していない。

QII002 陥し穴状遺構（図16、図版6）

本遺構は、QIIh区に位置する。検出面は、南部浮石の腐植層（ⅣA層）である。平面形は、
上端が不整な長楕円形、下端が細長い隅丸の長方形を呈する。短軸方向の断面は、スプーン状
を示すが、本来V字ないしU字状であったものが南部浮石層の崩壊によって変形したため
であろう。

規模は、上端長軸 292 cm・同短軸 52 cm、下端長軸 282 cm・同短軸 26 cm、中央付近の深さ
118 cmである。底面は、北東端へ向かって若干傾斜する。長軸の方向はほぼ N-45°-Eである。

埋土は、南部浮石の崩積物からなる下部と中礫浮石粒子に富む黒色腐植土からなる中上部に
大別される。周囲の土層の堆積状況は中礫浮石が本遺構で切られ、上位の腐植層は本遺構に向
かって層厚を増し、十和田b降下火山灰（ⅡAC層）は本遺構を覆って水平に堆積している。

遺物は出土していない。当遺構の構築時期は、埋土および周囲土層の堆積状況から中礫浮石
の腐植層（ⅢA層）の生成期と推定される。

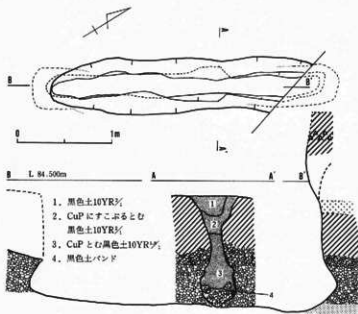


図16 QII002陥し穴状遺構

SI 001 陥し穴状遺構 (図 17、
図版 3)

本遺構はSIh区とSIle区
にまたがって位置する。検出面
は、南部浮石層上面である。平面
形は、上端、下端とも長楕円
形を呈する。短軸方向の断面形
は、V字状ないしY字状であ
る。

規模は、上端長軸 305 cm・同
短軸 100 cm、下端長軸 300
cm・同短軸 20 cm、中央部の深
さ 86 cm である。長軸方向は、
N-25°-E である。

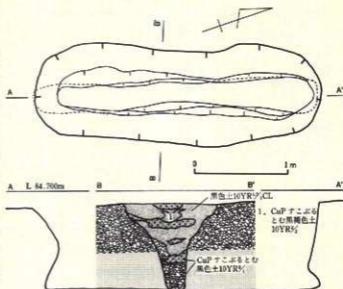


図17 SI 001陥し穴状遺構

埋土は、南部浮石層の崩壊物を主とする下部、中礫浮石層の崩壊物と黒色腐植土からなる上部に大別される。

当遺構の構築時期は、埋土状況から中礫浮石の腐植層 (ⅢA 層) の生成時期と推定される。遺物は出土していない。

QI 001 土坑 (図 18、図版 5)

本遺構はQIK区に位置する。検出面は、中礫浮石の腐植層 (ⅢA 層) である。平面形は、上端下端ともに、ヘラ形を呈する。底面はほぼ平坦をなし、長軸・短軸方向の断面形はいずれも逆台形状を示している。

規模は、上端軸 216 cm・同短軸 112 cm、下端長軸 176 cm・同短軸 68 cm、深さは中央部で 48 cm である。

埋土は上下に区分されるが、いずれも黒色腐植土であり、層界は判然としない。しかし、上部の埋土が十和田 b 降下火山灰 (To-b) の軽石粒を含むのに対し、下部は中礫浮石や南部浮石の軽石粒子を含む

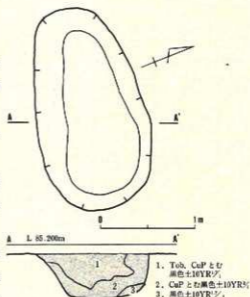


図18 QI 001土坑

点で区別される。当遺構の周囲には To-b を欠いているが、上部の埋土が To-b の軽石粒子を含むことから To-b の降下堆積後に構築されたものであろう。

遺物は、埋土上部から縄文晩期と考えられる土器片 2 片（図50の6・7、図版20の4・5）が出土している。遺物の示す年代は埋土状況から判断されるものと矛盾していない。

(2) 沖 I 遺跡の遺構

確認された遺構は、竪穴住居跡が 4 棟、掘立柱建物跡が 1 棟、竪穴住居跡状遺構が 4 棟、陥し穴状遺構が 2 基、井戸跡が 3 基、土坑が 16 基である。

BIII01 住居跡（図 19、図版 7）

本住居跡は BIIIe・j、CIIIa・b・f にまたがって位置する。検出面は南部浮石の腐植層（IV A 層）である。

規模・平面形は 560 cm × 480 cm の方形で、北側に幅 200 cm 長さ 450 cm の張出部をもつ。壁はほぼ垂直に立上がり、40～30 cm の高さを示す。床面は、南部浮石層下部まで掘りこまれており、シルト質土で貼付されている。

柱穴は 27 個検出された。このうち、P₁、P₂、P₃、P₇、P₈、P₁₀、P₁₂、P₁₄、P₁₆、P₁₇、P₁₉、P₂₀、P₂₁、P₂₂、P₂₄、P₂₆ は、直径 40 cm 前後、深さ 60 cm 以上あり壁際にそって 120 cm 前後の間隔で配列されている。P₅、P₆、P₉、P₁₃、P₂₃、P₂₅ は、深さが 60 cm より浅く副柱穴と考えられる。これらは、いずれも柱部分を残して貼床で被覆されているが、P₁₈、P₂₇ は全く被覆されず補修柱と推定されるものである。また、P₄、P₁₂、P₁₈ は完全に貼床で被覆されており、旧期の柱の可能性もある。

張出部の基部には皿状の窪がある。これは、外部からの雨水等の流入を防ぐためのものであろうか。なお、この窪は作り変えがおこなわれている。

床面のほぼ中央部には地床炉が認められ、炭化木細片を含む灰が集積している。この灰については種子分析および植物珪酸体分析・灰像分析を実施した（付編 2・3）。

埋土は、南部浮石の軽石粒子にとむ黒色腐植土を主体とする。

植物遺存体以外の遺物は出土していないが、遺構の形態的特徴から中世の住居跡と推定される。

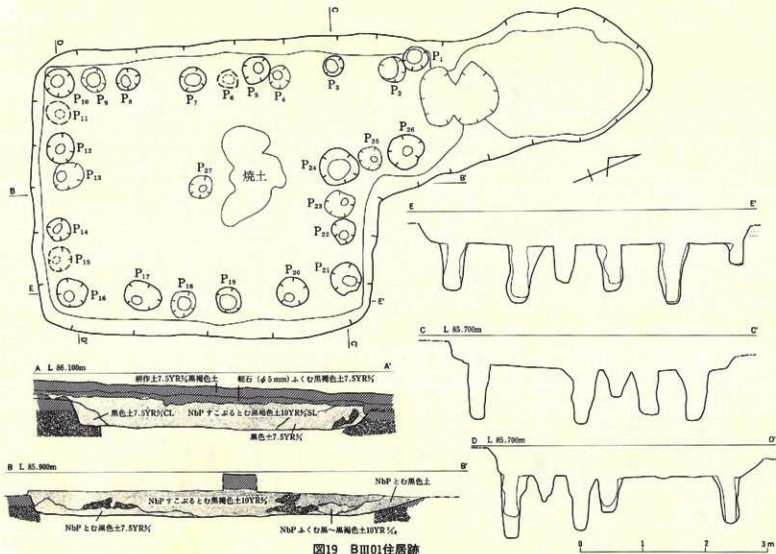


図19 BIII01住居跡

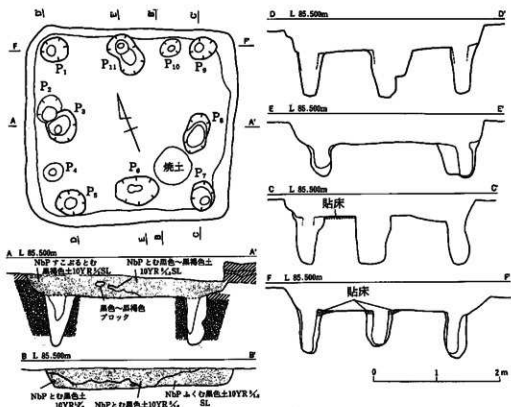


図20 CIII01住居跡

CIII01 住居跡 (図20、図版8)

本住居跡はCIII f・gに位置する。検出面は中礫浮石層(III C層)である。

規模・形態は314×332 cmの方形である。壁はほぼ垂直に立上がり、壁高は40～30 cmである。床面は南部浮石層まで掘りこまれてつくられており、シルト質土が貼付されている。

柱穴は壁際にして11個検出された。このうち120 cm前後の間隔で配置されるP₁、P₂、P₃、P₄、P₅、P₇、P₈、P₉、P₁₁は直径40 cm前後、深さ60 cm前後であり、主柱穴と考えられる。P₆、P₁₀は直径30 cm以下、深さ20 cm以下の小さな柱穴で補助的な柱穴であろう。

P₇、P₈、P₉にはさまれて地床炉があり、灰の集積が認められた。炉内の残灰については種子分析および植物珪酸体分析・灰像分析を実施した(付編2、3)。

埋土は、南部浮石の軽石粒子にとむ黒色腐植土を主体とする。

植物遺存体以外の遺物は出土していないが、遺構の形態的特徴から中世の住居跡と推定される。

CII01 住居跡 (図 21、図版 9)

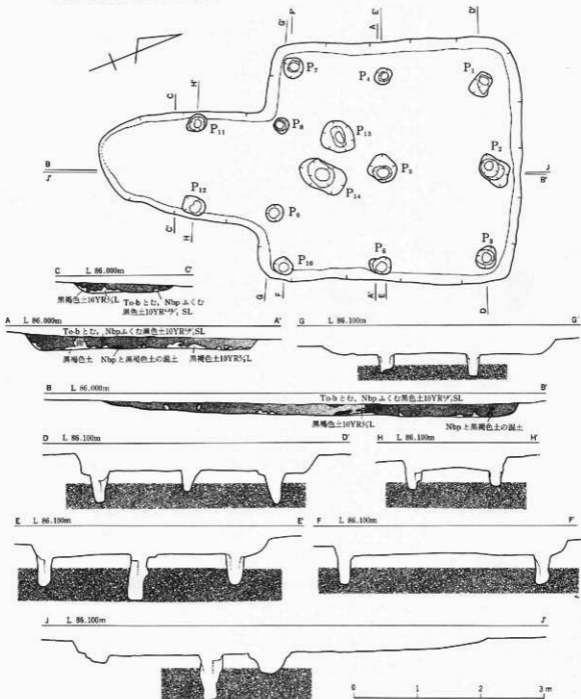


図21 CII01住居跡

規模・形態は一辺約 400 cm の正方形で、南辺のほぼ中央部に約 260 cm の張出し部を有している。壁は斜上し 20~30 cm の高さをもつ。炉跡は確認していない。

埋土は十和田 b 降下火山灰の軽石粒子にとむ黒色土、南部浮石の軽石粒子と黒褐色土の混合土、および黒褐色土から構成される。

柱穴は 14 個、確認された。主体部の 12 個のうち P₈、P₉ の 2 個は張出部の基部に位置し、張出部に伴うものと推定される。残りのうち 8 個 P₁~P₇、P₁₀ は壁際および中央部にほぼ 180 cm の間隔で規則的に配列される。それらの多くは直径 30 cm 前後、深さ 50 cm 前後であり、直径 15 cm ほど柱痕を残すものがある。

遺物は出土していないが、遺構の形態から中世の住居跡と推定される。

CII02 住居跡 (図 22、図版 10)

本住居跡は CIIx・y、CIII・e にまたがって位置する。検出面は中派浮石の腐植層 (III A 層) である。

規模・平面形は 400×380 cm の方形である。南側に張出部をもつが、その大半は CIII009 井戸により切られている。壁高は 20 cm ほどである。

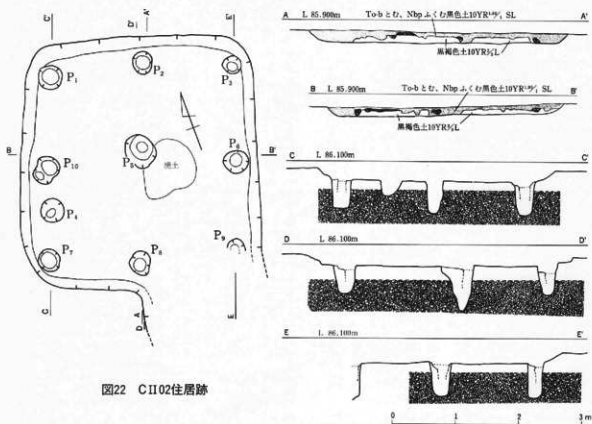


図22 CII02住居跡

埋土は、十和田b降下火山灰の軽石粒子にとむ黒色土、南部浮石の軽石粒子と黒褐色土の混合土および黒褐色土から構成される。

柱穴は、壁面にそって9個、中央部に1個の計10個検出された。このうちP₁~P₃、P₅~P₁₀の9個が150cm前後の間隔で規則的に配置されることから主柱穴と推定される。これらの多くは直径30cm前後、深さ50cm前後である。

P₃とP₅の間には地床炉が確認され、炭化植物の細片や灰が集積していた。炉内の残渣については、種子分析および植物珪酸体分析、灰像分析を実施した(付編2・3)。

植物残渣以外の遺物は出土していないが、遺構の形態的特徴から中世の住居跡と推定される。

BIII02 掘立柱建物跡 (図23、図版11)

当遺構はBIII区、CIII区にまたがって位置する。削平等のために一部柱穴が不明であるが、7間×5間の建物跡と推定される。柱穴の間隔は1.9~2.1mである。

当遺構はBIII01住居跡、CIII01住居跡と重複し、その重複部の柱穴がBIII01、CIII01により切られている。

遺物は出土していない。

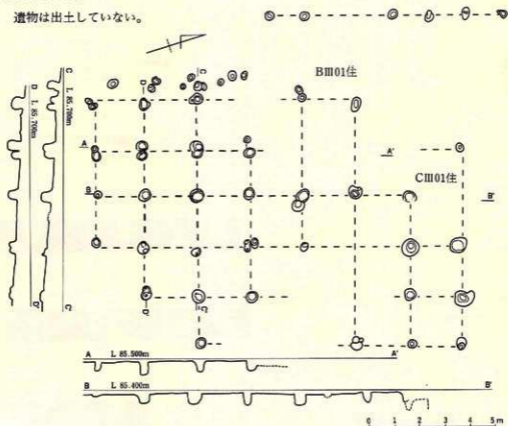


図23 BIII02掘立柱建物跡

BII01 住居跡状遺構 (図24、図版11)

本遺構は BIIu・w 区、BIIb・e 区にまたがって位置する。検出面は南部浮石 (IV 層) である。

平面形は不整な楕円形を呈するが明瞭な壁は確認されない。規模は、直径 266 cm、短径 154 cm、中央部の深さ 16 cm である。底面には、弱い焼変部と踏みめ部分が認められ、また不規則に配列する性格不明の小穴、浅い小溝がある。埋土は、十和田 b 降下火山灰の軽石粒子や小〜中礫をふくむ黒色土からなる。遺物は出土していない。

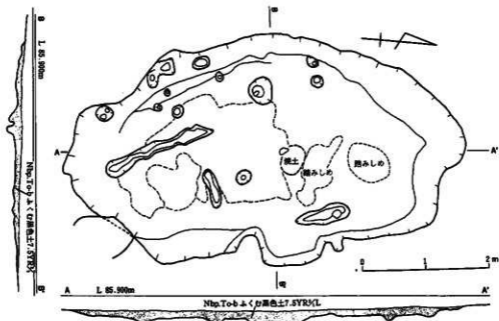


図24 BII01住居跡状遺構

CII03 住居跡状遺構 (図25、図版12)

本遺構は CIIj・i・n・o に位置する。検出面は中礫浮石 (III 層) である。

平面形はほぼ円形を呈し、直径は 770 cm 前後である。壁高は 25 cm ほどである。床面は部分的に不規則で浅い波状の凹凸が認められるが、おおむね平坦である。炉跡はなく、柱穴状も認められない。

埋土は、十和田 b 降下火山灰の軽石粒子にとむ黒色土を主体とする。遺物は、埋土中より縄文土器細片 (図 51 の 8、図版 21 の 4、5、10) が、また床面から鉄釘 (図 52 の 6、図版 21 の 23) および炭化した豆が出土している。このことから、時代の異なる複数の遺構が重複している可能性がある。

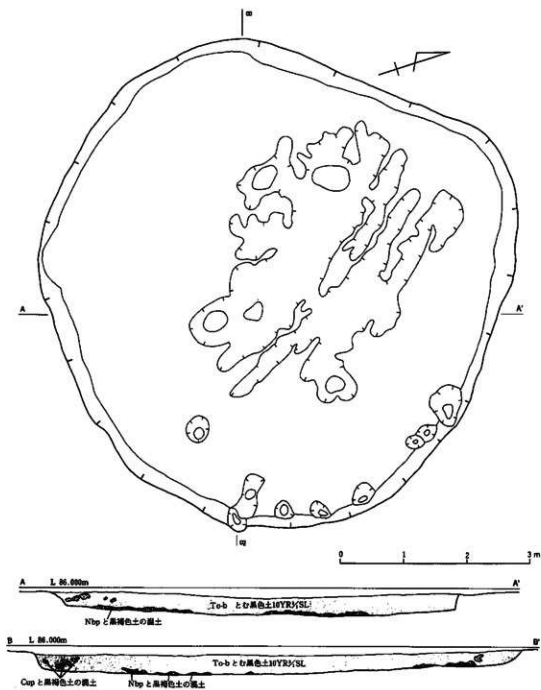


図25 CII03住居跡状遺構

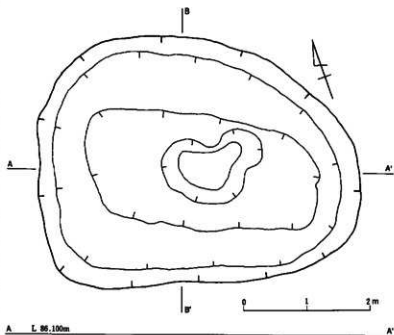
D II 01 住居跡状遺構 (図 26、図版 13)

本遺構は D II k・l・p・q にまたがって位置する。検出面は中塚浮石 (III C 層) である。

平面形は不整な楕円形

を呈し、直径約 520 cm、短径約 200 cm である。明瞭な壁は認められず、床面は中央部へ向かって傾斜し、全体に浅いすり鉢状を呈する。中央部の深さは 50 cm である。

埋土は十和田 b 降下火山灰および南部浮石の軽石粒子にとむ黒色土からなる。埋土中から粗製の縄文土器片が数点出土している (図 51 の 7、11、図版 21 の 8、9)。



D II 02 住居跡状遺構

(図 27、図版 14)

本遺構は D II n・o 区に位置し、その東側は調査区外へのびていることから全体形を確認していない。検出面は、中塚浮石 (III C 層) である。

平面形は最大幅 240 cm、長さ 270 cm の U 字状を呈し、C II 01 住居跡等の張り出し部の形状に類似する。壁と床は一体化しており、ゆるやかに下方へカーブを描く。

埋土は十和田 b 降下火山灰の軽石にとむ黒色土からなる。遺物は出土していない。

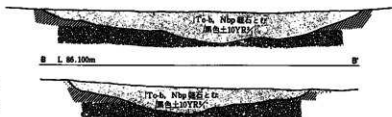


図 26 D II 01 住居跡状遺構

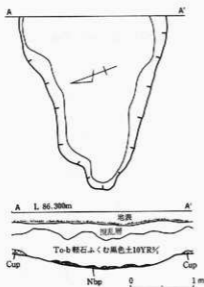


図27 DII02住居跡状遺構

BIII004 陥し穴状遺構 (図28、図版15)

本遺構は BIIIr・s 区に位置する。検出面は中礫浮石 (III C 層) である。

平面形は、上端が不整な長楕円状、下端が隅丸の細長い長方形を呈する。短軸方向の断面は V 字状である。規模は上端長軸 380 cm・短軸 36 cm、下端長軸 410 cm、短軸 10 cm、中央部の深さ 108 cm である。長軸方向は、N-70°-E を示す。

埋土は、中礫浮石やその腐植層の崩落土からなる。遺物は出土していないが、当遺構は埋土状況から中礫浮石の腐植層形成期に構築されたものと推定される。

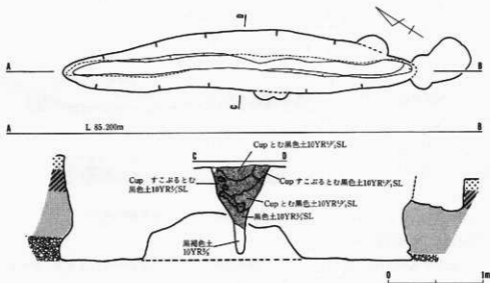


図28 BIII004陥し穴状遺構

BIII005 陥し穴状遺構 (図29、図版15)

本遺構は BIII t・y 区に位置する。検出面は中礫浮石 (III C 層) である。

平面形は、上端が不整な長楕円状、下端が隅丸の細長い長方形を呈し、全体にゆるく湾曲する。短軸方向の断面形は V 字状である。規模は、上端長軸 372 cm、短軸 64 cm、下端長軸 354

cm、短軸 16 cm、中央部の深さ 90 cm である。長軸の方向は N-45°-W である。

埋土は、水成のシルト層の崩壊土からなる下部と中礫浮石の軽石に富む黒色土からなる上部に大分される。北西端の土層断面には、最上部に黒色土が確認され、明らかに中礫浮石を切っている（図 5、図版 2）。

遺物は出土していないが、埋土状況より本遺構は中礫浮石の腐植層（ⅢA 層）形成期に構築されたものと推定される。

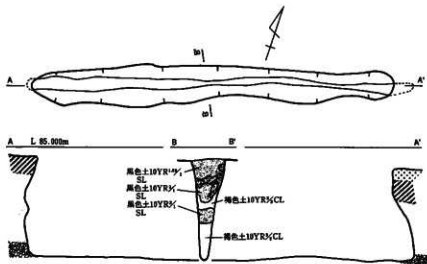


図29 BIII005陥し穴状遺構

BIII003 井戸跡 (図 30、図版 16)

本遺構は BIIIw・x、BIVa・x に位置するが、その大部分は BIIIw に含まれる。検出面は中礫浮石（ⅢC 層）である。

平面形は、上端径 252 cm のほぼ円形を呈する。湧水のために、深さや下半部の形状を正確に確認できないが、少なくとも礫層（Ⅶ層）まで円筒状に掘込まれていると推定される。

埋土は、レンズ状に堆積し、その上部は十和田 b 降下火山灰の軽石に富む黒色土、下部は中礫浮石の軽石に富む黒色土と中礫浮石の崩壊土の互層からなる。また、径 5 cm 前後の礫が全体に含まれ

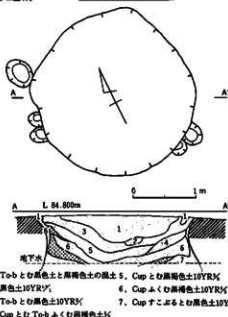


図30 BIII003井戸跡

ている。

遺物としては埋土最上部より鉄滓が出土している（図版21の27）。

CIII005 井戸跡（図31、図版16）

本遺構はCIIIpとBIIIcにまたがって位置し、その西縁はCIV004土坑（灰溜）を切っている。検出面は中掬浮石（III C層）である。

平面形は上端径150cm、中端径100cmのほぼ円形を呈する。湧水のため、深さや下半分の形状を正確に確認できないが、少なくとも礫層（VII層）まで円筒状に掘り込まれていると推定される。

観察できた埋土は、湧水面上の部分に限られるが、十和田b降下火山灰の軽石に富む黒色土である。

遺物は出土していない。

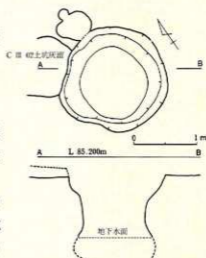


図31 CIII005井戸跡

CIII009 井戸跡（図32、図版17）

本遺構はCIIIc・dに位置し、CII02住居跡の張り出し部の大半および竪穴の一部を切っている。

平面形は円形を呈する。上端の直径は230cmほどであるが、深さ120cm付近で直径140cmとなり、崩壊の危険があるために、240cmの深さまでしか掘下げることができなかったが、検土杖で調べたところ段丘礫層（VII層）まで掘りこまれていることが確認できた。なお、VII層上面は、掘り下げた底面より70cmほどの深さである。

埋土は、十和田b降下火山灰に富む黒色土の上部と、黒色土と黄白色砂が混合し南部浮石の崩壊物を含む下部とに大別される。また、全体的に中〜大礫が含まれている。

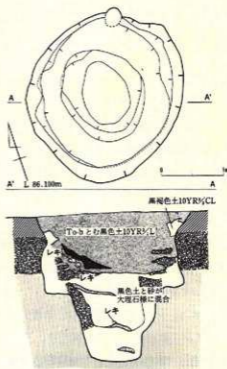


図32 CIII009井戸跡

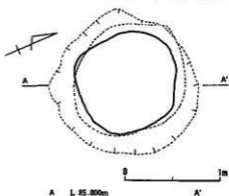
遺物は出土していない。

BII001土坑 (図33、図版15)

本遺構はBII₂区に位置する。検出面は南部浮石の腐植層(IVA層)である。全体の形はフラスコ状を呈するが、これは壁の下半部を占める南部浮石層(IVC層)の崩落による2次的変形と考えられ、本来は円筒状の形状を持っていたと推定される。規模は上端径104cm、下端径78cmである。底面は水平かつ平坦である。

埋土は南部浮石の崩壊土およびそれと黒色土との混合物からなる。

遺物は出土していない。



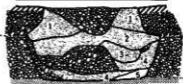
CIII003・004土坑(灰溜遺構) (図34、図版16)

本遺構はCIIIk・p、BIIIo・tに位置するが、大部分はCIIIk・pにある。検出面は中振浮石層(III層)である。

平面形がほぼ円形の2つの浅い皿状遺構がわずかに重なって並び、全体でひょうたん状を呈する。003は上端の長径84cm、短径56cm、004は直径64cmである。

埋土は腐植を含む灰から構成される。焼土を伴わず、灰捨場的性格を有する遺構と推定される。埋土には魚骨、貝殻、獣骨、種子等が含まれており、これらの鑑定分析を実施した(付編1、2)。

遺物としては、埋土上



1. Nbp ふくむ黒色~黒褐色土10YR 5/6 SL
2. Nbp とむ黒色~黒褐色土10YR 5/6 SL
3. Nbp すこぶるとむ黒褐色土10YR 5/6 SL
4. Nbp すこぶるとむ黒色~黒褐色土10YR 5/6 SL
5. Nbp ふくむ SL

図33 BII001土坑

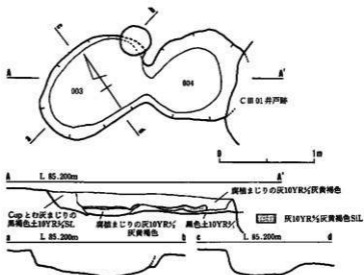


図34 CIII003, 004土坑(灰溜)

部から流紋岩製の砥石（図 52 の 2、図版 21 の 29）が出土している。

CII001 土坑（図 35、図版 14）

本遺構は CII n・s 区に位置する。検出面は中塚浮石層（III C 層）である。

上端の平面形は、ほぼ楕円形で、長径 180 cm、短径 100 cm である。南側は南部浮石（IV C 層）の下面まで掘り込まれているのに対し、北側はその上面である。したがって、南で深く北で浅くなるが、最大の深さは 80 cm である。

埋土は、南部浮石層からなる下部と中塚浮石および十和田 b 降下火山灰に富む黒色～黒褐色土からなる上部とに大別される。

遺物は出土していない。

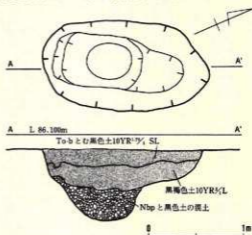


図35 CII001土坑

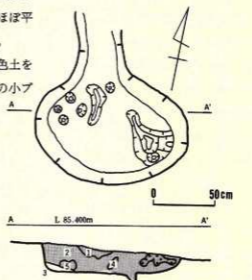
CIII001 土坑（図 35、図版 17）

本遺構は、CIII m 区に位置する。検出面は中塚浮石層（III C 層）である。

全体の形は、上端、下端ともに不整な楕円形で、上端長軸 126 cm、短軸 90 cm、下端長軸 104 cm、短軸 68 cm、中央部の深さ 18 cm の規模をもつ。底面はほぼ平坦であるが、性格不明の小穴、小溝が存在する。

埋土は、中塚浮石の崩壊物ブロックを含む黒色土を主体とする。最上部には、十和田 a 降下火山灰の小ブロックが認められる。

遺物は出土していない。



1. To-a の小ブロックよくむ黒色土10YR5/L
2. Cap よくむ黒色土10YR5/SL
3. 黒褐色土10YR5/SL
4. Cap よくむ黒褐色土10YR5/L
5. 黒褐色土10YR5/SL

図36 CIII001土坑

BIII001 土坑 (図 37、図版 17)

本遺構は、BIIIj 区に位置する。検出面は南部浮石層 (IVC 層) であるが、BIII01 住居跡の床面に切られている。

平面形は、上端、下端ともにほぼ円形を呈する。規模は、上端径 120 cm、下端径 102 cm、中央部の深さ 18 cm である。

埋土は、南部浮石と黒色土の混合土からなる。

遺物は出土していない。



A L 85.300m A'



1. Nbp とむ黒色土10YR5/1
2. Nbp とむ黒褐色土10YR5/2
3. Nbp よくむ黒褐色土10YR5/3
4. BIII01住居跡のほり床

図37 BIII001土坑

0 50cm

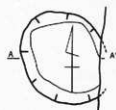
BIII006 土坑 (図 38)

本遺構は、BIIIe 区に位置し、その東端は BIII01 住居跡により切られている。検出面は、南部浮石層 (IVC 層) である。

平面形は、上端、下端ともに不整な楕円形で、全体的には皿状を呈する。規模は、上端長軸 108 cm 短軸 88 cm、下端長軸 90 cm 短軸 64 cm、中央部の深さ 10 cm である。

埋土は、南部浮石に富む黒色土からなる。

遺物は出土していない。



A L 85.700m A'



Nbp とむ黒色土10YR5/1

図38 BIII006土坑

0 50cm

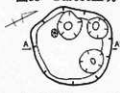
BIII002 土坑 (図 39、図版 15)

本遺構は BIIIi 区に位置する。検出面は南部浮石の腐植層 (IVA 層) である。

上端の平面形は径 80 cm 前後の不整な円形、全体の形は丸底の浅皿状を呈する。底面には性格不明の小穴が認められる。

埋土は、南部浮石の軽石に富む黒色土からなる。

遺物は出土していない。



A L 85.600m A'

Nbp とむ黒色土10YR5/1



0 50cm

図39 BIII002土坑

CIII006 土坑 (図 40、図版 14)

本遺構は、CIIIi 区に位置する径 80 cm の皿形を呈する小土坑である。検出面は、中塚浮石の腐植層 (III A 層) である。埋土は、下半部が黒褐色土、上半部が十和田 b 降下火山灰の軽石を含む黒色土から構成される。

遺物は出土していない。



A L 85.700m A'

To-b よくむ黒色土10YR5/3



黒褐色土10YR5/2

0 50cm

図40 CIII006土坑

CIII007 a・b 土坑 (図 41、図版 14・18)

両遺構は CIII 区に位置し、ほぼ接して南北に並んで配列する。検出面は、中礫浮石の腐植層(III A 層)である。いずれの形状も深さ 10 cm ほどの浅い皿状を呈する。b 土坑には柱穴状の落ちこみが伴う。

埋土は、十和田 b 降下火山灰の軽石を含む黒色土を主体とする。

遺物は出土していない。

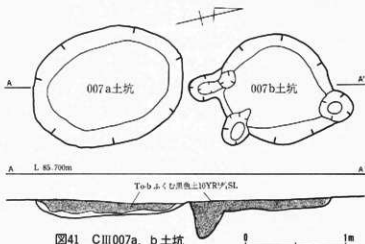


図41 CIII007a, b 土坑

CIII008 土坑 (図 42、図版 18)

本遺構は CIII 区に位置する。その東端は、CIII007 b 土坑と重なっているが、切り合い関係は明瞭ではない。検出面は、中礫浮石の腐植層(III A 層)である。径 40 cm、深さ 20 cm と径 50 cm、深さ 20 cm の二つの小さな皿状土坑が結合した形状である。

埋土は、黒褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。

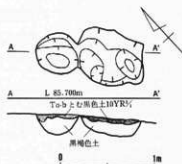


図42 CIII008土坑

DIII001 土坑 (図 43、図版 18)

本遺構は、DIII a 区に位置する。検出面は、中礫浮石の腐植層(III A 層)である。

平面形は不整な楕円形で、深さ 5 cm ほどの極めて浅い土坑である。柱穴状の落ちこみを伴う。

埋土は十和田 b 降下火山灰を含む黒色土からなる。

遺物は出土していない。

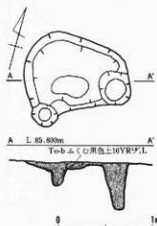


図43 DIII001土坑

DIII002 土坑 (図44、図版18)

本遺構は、DIIIa 区に位置する。検出面は、中礫浮石の腐植層(III A層)である。

深さ 20 cm ほどの不整なひょうたん形の平面形を呈する土坑である。埋土は、下部が黒褐色土、上部が黒色土からなる。遺物は出土していない。

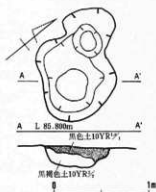


図44 DIII002土坑

DIII003・004 土坑 (図45・図版18)

DIII003 土坑は DIIIa 区、DIII004 土坑は DIIIb 区に位置し、ほぼ両区の境界線上で重なっている。検出面は、中礫浮石層(III C層)

である。検出状況および埋土の様相から、明らかに 003 土坑が 004 土坑を切っていることが確認できる。

003 は径 150 cm ほどのほぼ円形の平面形を有する。一方、004 土坑は長径 160 cm、短径 100 cm ほどの不整な楕円形の平面形を有するいずれも浅い皿形の土坑である。

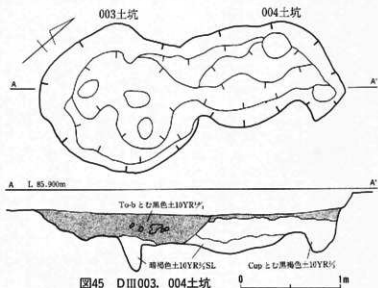


図45 DIII003、004土坑

埋土は、003 土坑が十和田 b 降下火山灰に富む黒色土を主体とし、004 土坑が黒褐色土を主体としている。遺物は出土していない。

CII002 土坑 (図46)

本遺構は CII₂区に位置し、CII02 住居跡によって切られている。検出面は南部浮石の腐植層(IV A層)である。

上端は径 80 cm 前後のほぼ円形の平面形で、深さ 30 cm ほどのボール状の全体形を呈する。

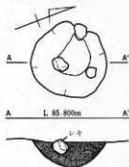


図46 CII002土坑

埋土は黒色土からなる。埋土上部に亜円礫が含まれる。
遺物は出土していない。

D II 001 土坑 (図47、図版12)

本遺構は、D II u、D II v 両区の境界上に位置する。検出面は中礫浮石(III C層)である。上端は径60 cmほどの円形で、深さ30 cmほどのボール状の全体形を呈する。

埋土は黒色土からなり、遺物は出土していない。

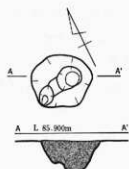


図47 D II 001土坑

C III 002 焼土 (図48、図版17)

本遺構はC III I区に位置する。検出面は中礫浮石の腐植層(III A層)である。

直径80 cm、短径70 cmの楕円状に焼土ブロック混じりの黒色土が広がっている。厚さは約10 cmである。

遺物は出土していない。

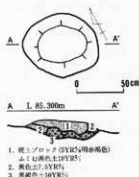


図48 C III 002焼土

D I 001 溝・E I 001 溝 (図49、図版19)

D I 001 溝はD I・II区に位置し、北縁をほぼ東西に走り、調査区外へのびる。一方、E I 001

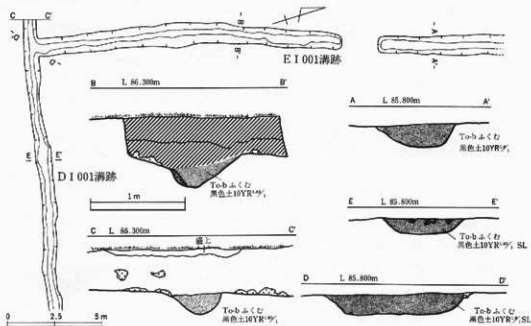


図49 D I 001溝跡, E I 001溝跡

溝はE I区の東縁をほぼ南北に一部途切れながら走り、その南端はD I y区で前者に直角に接し、北端部は擾乱により消滅している。両者の切り合い関係は明瞭ではなく同一時期の可能性が強い。検出面は中振浮石の腐植層(ⅢA層)である。150~200cmの幅と20cmほどの深さを有する。

埋土は十和田b降下火山灰の軽石に富む黒色土である。

遺物は出土していない。

2. 遺物

(1) 馬場II遺跡の遺物

出土遺物は、土器片40点、礫石器1点、石器剥片1点である。

土器

土器片は、縄文土器片25点、土師器片15点である。

25点の縄文土器片のうち図50の1・図版20の1と図版20の3は接合でき、推定口径21cmの粗製土器の口縁部~胴部である。全面にLRの単節縄文が施され、炭化物が付着している。胎土には細礫や石英粒が含まれる。出土層準が中振浮石の腐植層(ⅢA層)であることから、縄文時代中期以後に属する土器と推定される。

図50の2・図版20の2の径6.2cmの底部片および図版20の11の胴部片は、上記土器片と同一調査区あるいは隣接調査区の同一層準から出土し、また類似の胎土組成をもち、LRの単節縄文が施されていることから、上記土器片と同一個体を構成するものである可能性が大きい。

RLの単節縄文が施され、焼成により胎土が安山岩様に黒色化している共通の特徴を有する図50の4・図版20の12、図版20の6、9、14、15、18、20の土器片は、同一調査区の同一層準(ⅢA層)から出土しており、同一個体と推定される。

図50の8・図版20の7と図50の9は、LRの単節縄文が施され、粗砂の少ないかなり均質な胎土をもち、にぶい黄褐色に焼成された土器片である。

図50の11、図版13の11は比較的太い不明瞭なLRの単節縄文が施されている。胎土は、粗砂に富み緻雑度が認められる。

図50の3・図版20の17は、比較的細いLRの単節縄文が施されにぶい赤褐色に焼成された土器片である。

図50の7・図版20の4、図50の6・図版20の5は、Q I 001土坑の埋土から出土したもので、同一の皿形土器の口縁部、体部片と推定される。LRの細い単節縄文、鎖状の浮文や沈線が施されている。

(21.0) • (9.7) • —

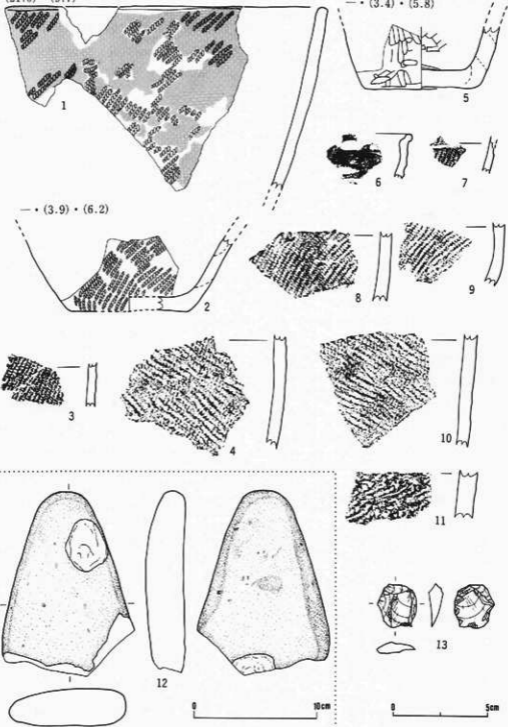


图50 馬場II遺跡出土遺物

図50の5・図版20の21は、径5.8cmのカメ形土師器の底部である。胎土は細礫に富み、に
 ぶい黄褐色に焼成され、ミガキ調整が施されている。図版20の22-26も同一個体と推定される。

石器

図50の12・図版20の28は、玢岩製の礫石器である。側面や先端部に磨耗による光沢面が生
 じている。図50の13・図版20の27は、輝緑凝灰岩製の剥片である。両者は、いずれも中礫浮
 石の腐植層(ⅢA層)から出土している。

(2) 沖I遺跡の遺物

出土遺物は、土器片33点、不定形石器1点、礫石器1点、鉄釘4点、磁石1点、鉄滓3点、
 貨幣2点である。

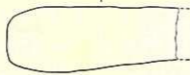
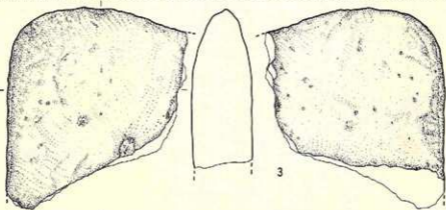
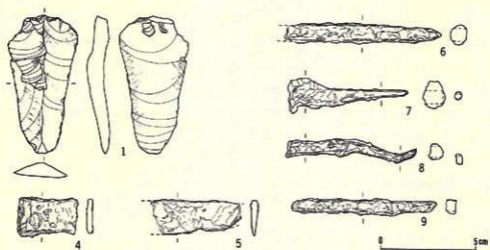
土器

図51の1・図版21の1は、繊維痕が目立つ縄文土器の口縁部片である。胎土は粗砂に富む。

図51の2・図版21の3、図版21の4、5は、CII03住居跡状遺構埋土から出土した縄文土器
 片で、上記土器片と類似の特徴を有する。同遺構埋土からは、図51の8・図版21の10のLRの
 単節縄文の施された縄文土器口縁部片も出土している。



図51 沖I遺跡出土遺物(1)



0 10cm



10



11

0 2cm

图52 冲I 遺跡出土遺物 (2)

図 51 の 7・図版 21 の 9、図 1 の 11・図版 21 の 8 は、DII01 住居跡状遺構埋土から出土した縄文土器片である。いずれも LR の単節縄文が施されている。

図 51 の 9・図版 21 の 7 は、E I 001 溝の北端攪乱部から出土した縄文土器の口縁部片で、RL の単節縄文が施されている。

図 51 の 3・図版 21 の 11、図 51 の 4・図版 21 の 12 は、細い R の圧痕が施された弥生土器片で、十和田 b 降下火山灰（IIAC 層）から出土した。

図版 21 の 18、19 は、脚付互器の脚部である。外面は指でなでて調整され、指紋の痕が残されている。胎土は粘土を主とし、橙色に焼成されている。出土層位は、IA 層である。

その他、図版 21 の 16、17 の土器器片も出土している。

石器

図 52 の 1・図版 21 の 28 は、頁岩製の粗く刃部加工された不定形石器である。出土層位は、中瀬浮石の腐植層（III A 層）である。図 52 の 3・図版 21 の 21 は、安山岩製の礫石器で、側面に明瞭な擦痕が残されている。図 52 の 2・図版 21 の 29 は流紋岩製の砥石で、CIII004・005 土坑（灰溜）埋土から出土した。

鉄製品

図 52 の 6・図版 21 の 23、図 52 の 7・図版 21 の 24、図 52 の 8・図版 21 の 25、図 52 の 9・図版 21 の 26 は、いずれも角釘である。このうち、図 52 の 6・図版 21 の 23 は CII003 住居跡状遺構床面付近から、また図 52 の 7・図版 21 の 24 は BIII003 井戸埋土から出土した。図 52 の 5・図版 21 の 22 は刃器の一部と推定されるもの、図 52 の 4・図版 21 の 30 は用途不明の枝状鉄片である。図版 21 の 27 は BIII003 井戸埋土から出土した鉄滓である。

貨幣

図 52 の 10・図版 21 の 31 は、永楽通宝である。図 52 の 11・図版 21 の 32 は配字から元豊通宝などの渡来銭、あるいはその本邦模倣銭と推定される破片である。これらはいずれも IA 層から出土している。

V 考察とまとめ

1. 馬場II遺跡

発見された6基の陥し穴状遺構について、若干の考察を試み、まとめたい。

(1) 陥し穴状遺構の形態と構築時期の関係

発見された陥し穴状遺構は、中塚浮石（約5,000年前）の堆積前に構築されたものと、堆積後に構築されたものに二分される。両者は、明らかな形態的差異を示している。

中塚浮石堆積以前に構築されたもの（P I 001）は、ほぼ円形の平面形と摺鉢状の全体形を呈するもので、田村（1987）のC型に該当する。当該遺構は南部浮石層（約9,000年前）を切っており、その構築時期が南部浮石の堆積以降であることは確実である。また、南部浮石の腐植層（IV A層）上部が検出面であり、埋土最上部が中塚浮石の一次堆積層であることから、中塚浮石の堆積よりさほど古くない時期に構築された遺構と推定される。

中塚浮石堆積以降に構築されたものは、全体形が溝状を呈するもので、田村（1987）のA型に該当する。いずれも中塚浮石層を切り、当浮石の腐植層（III A層）を検出面とする。また、一基（Q II 002）は明らかに十和田b降下火山灰（約2,000年前）に被われているのが確認される。したがって、これらの構築時期は、中塚浮石の腐植層形成期（約5,000～2,000年前）と推定される。

このように中塚浮石の堆積を境にして、その前後に構築された陥し穴状遺構の形態が明らかに異なっている。このことは、これまでに得られている資料（福田、1986、田村、1987）と調和する。

(2) 陥し穴状遺構の形態二次的変形におよぼす周囲土層の影響

IV章において、溝状の陥し穴状遺構の短軸断面がピベット状、変形V字状などの形態を有するのは、周囲の堆積層の性状が関与した二次的変形の可能性があることを指摘した。ここで、その点について少し補足しておきたい。

当該遺構では、いずれも壁面の構成層として極めて崩落し易い南部浮石（IV C層）が約50 cmの層厚で認められる。下部埋土は例外なくこの崩落物から構成されて、実際に構築後に崩落が生じて壁がえぐられ、形状変化が生じたことを示している。一方、しばしば南部浮石の上位にみられる面結層は崩壊しがたく、遺構本来の形状をとどめるために二次的変形にアクセントを与えることになる。なお、この面結層は段丘構成層上面の傾斜域（II章参照）に堆積した南部浮石が重力不安定から二次的に移動堆積したものに地下水の影響が加わって形成されたものと推定される。

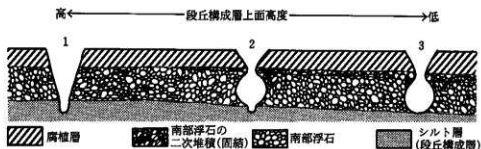


図53 陥し穴状遺構の立地と形態の関係

遺構の立地とその形態の関係は図53のようにまとめられる。1は段丘構成層上面の高度が高く平坦で南部浮石の固結層はない。2、3では段丘構成層上面の高度は低下し、南部浮石の固結層が現れる。遺構の変形過程を上記2層の関係をもまえて、模式的に示せば図54のようになろう。1(PⅡ001)では、固結層がないために南部浮石から上位層が自然に崩落し、Y字状の断面形を呈する。一方、2(PⅡ002、QⅡ001)では、南部浮石、固結層が壁の中段にあり、また段丘構成層まで掘り込まれているために、南部浮石の選択的崩壊が生じて、壁の中段が膨んだビベット状の断面を呈している。3(QⅡ002)でも固結層を伴う南部浮石が認められる。しかし、その位置が壁の下部であるためにスプーン状に変形する。

2. 沖I遺跡

本調査で明らかになったことは、次のようにまとめられる。

(1)発見された主な遺構は、4棟の住居跡、1棟の掘立柱建物跡、2基の陥し穴状遺構、3基の井戸跡などである。

(2)住居跡は、いずれも方形の平面形を呈し、

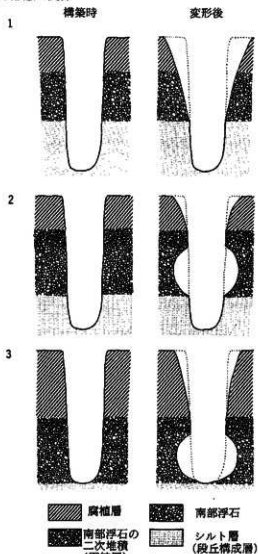


図54 陥し穴状遺構の形態変化と土層の関係

壁面にそって規則的に配列する柱穴を有する。時代を決定できる遺物を欠くが、これらの形態が近接する長瀬 C 遺跡（岩理文、1977）などで発見されている中世の住居跡のそれと類似することから、ほぼ同時代の遺構と推定される。

(3) 3 棟の住居跡には地床炉跡が伴う。炉跡には、炭化種実、珪化植物組織片、植物珪酸体が残存していた（付編 2、3）。

(4) 陥し穴状遺構は溝状の全体形を呈し、田村（1987）の A 型に該当するものである。これらは、中瀬浮石層を切っており、当テフラ層堆積以降に構築されたものと推定される。

(5) 得られた遺物は、土器片 33 片などで極めて少ない。

〈引用参考文献〉

- 福田友之（1981）溝状ピットに関する覚書、弘前大学考古学研究、No.1、14-29
福田友之（1986）考古学からみた「中瀬浮石」の降下年代、弘前大学考古学研究、No.3、4-17
早川由紀夫（1983）十和田火山中瀬テフラ層の分布・粒度組成・年代、火山：第 2 集、28、263-273
岩手県（1971）土地分類基本調査：一戸、国土調査、369。
岩手県埋文センター（1977）岩手県埋文センター文化財調査報告第 22 集、二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書、二戸市長瀬 C 遺跡・長瀬 B 遺跡
加藤芳朗（1971）土壌、「第四紀」、共立出版、167-205
松山 力（1978）自然環境、「中瀬遺跡発掘調査報告書」、二戸市教育委員会、11-30
松山 力・大池昭二（1986）十和田火山噴出物と火山活動、十和田科学博物館、No.4、1-64
大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之（1966）・馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰、第四紀研究、5、29-35
大池昭二・高橋 一（1970）南部浮石の¹⁴C 年代—日本の第四紀層の¹⁴C 年代（62）一、地球科学、24、232-233
ベドロジスト懇談会（1984）土壌調査ハンドブック、博友社、156 P
田村壮一（1987）陥し穴状遺構の形態と時期について、紀要 VII、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、25-44

沖 I 遺跡 CIII003・004 (灰溜) 土坑出土動物遺存体について

陸前高田市立博物館 佐藤正彦

東北学院大学 熊谷 賢

沖 I 遺跡 CIII003・004 (灰溜) 土坑出土動物遺存体

I. 軟体動物 MOLLUSCA

i ; 腹足綱 GASTROPODA

1. ミミガイ科の一種 *Haliotidae* gen. et sp. indet.

破片が一片出土している。破砕が著しく計測及び種の同定は不可である。

2. タマキビ *Littorina brevicula* (Philippi)

3点出土している。1点は幼貝で殻高3.9mm、殻径3.7mmを測る。他の2点は殻口部に欠損がみられ殻高は計測不可である。殻径は12.3mm・9.2mmを測る。焼けて灰色を呈している。

ii ; 二枚貝綱 BIVALVIA

1. カワシンジュガイ *Margaritifera laevis* (Haas)

右殻7点・左殻6点が出土している。ほとんどが焼けて灰色を呈している。破砕が著しく計測可能個体は右殻1点のみである。(予測計測値 殻長65.2mm、殻高31.1mm)

2. ウバガイ *Spisula* (*Pseudo cardium*) *sachalinensis* (Schrenck)

焼けた小片が少量出土している。左殻1点を同定した。破砕が著しく計測不可である。小片は同一個体のものと思われる。

3. ホタテガイ *Patinopecten* (*Mizuhopecten*) *yessoensis* (Jay)

小破片が1片出土している。小破片のため計測不可である。

II. 節足動物 APTHROPODA

i ; 軟甲亜綱 MALACOSTRACA

1. 短尾亜目的一种 *Byachyura* fam. indet.

掌部片5点出土。焼成を受け白色化している。動指部分の破片1点を含む掌部のものと思われる細片が見られた。動指部分のものは、可動指か不動指かは不明である。

III. 脊椎動物 VERTEBRATA

i ; 硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

1. マイワシ *Sardinops melanosticta* (TEMMINCK et SCHLEGEL)

腹椎骨 1 点、尾椎骨 1 点出土。尾椎骨は焼成を受け白色化している。

椎体横径 × 椎体長 (mm)

腹椎 2.2 × 1.8

尾椎 2.3 × 2.0

2. ニシン科の一種 *Clupeidae* gen et sp. indet.

腹椎骨 3 点、尾椎骨 2 点出土。すべて焼成を受け白色化している。イワシ類のものと思われる。予想種としてはウルメイワシが挙げられる。

椎体横径 × 椎体長 (mm)

腹椎 2.7 × 2.3

2.4 × 2.3

1.8 × 1.5

尾椎 2.6 × 2.5

3.9 × 3.1

3. サケ科の一種 *Salomonidae* gen. et sp. indet.

脊椎骨小片 1 点出土・焼成を受け白色化している。

4. ウグイ *Tribolodon hakomensis* (GUNTHER)

腹椎骨 3 点、尾椎骨 9 点出土、全て焼成を受け白色化している。本遺跡では最も出土量の多かった魚種である。椎体横径 3.0 mm 以下の小型の個体と、4.9 mm を計る中型の個体の 2 個体が出土している。

椎体横径 × 椎体長 (mm)

腹椎骨 1.8 × 1.9

2.4 × 2.2

2.3 × 2.1

尾椎骨 3.0 × 2.9

2.1 × 2.0

2.3 × 2.5

2.3 × 2.4

1.9 × 1.9

2.4 × 2.5

1.6 × 1.8

2.2 × 2.4

4.9 × 4.3 — 中型

} 小型

5. カレイ科 *Pleuronetidae* gen. et sp. indet.

左歯骨1点、腹椎骨3点、尾椎骨4点。尾椎骨1点を除き、全て焼けて白色を呈している。椎体横径などの計測値より同一個体のものである可能性が高い。

椎体横径×椎体長 (mm)

腹椎骨 5.4 × 4.8

5.6 × 5.8

5.5 × 5.8

尾椎骨 4.4 × 4.2

4.8 × 4.8

4.1 × 4.4

4.2 × 4.3

歯骨高 3.8 mm

6. マダラ *Gadus macrocephalus* TILESIIUS

腹椎骨1点、前上顎骨片数片、本遺跡出土魚類では最も大型のものである。他資料とは異なり焼成は受けていない。

椎体横径×椎体長 (mm)

腹椎骨 11.7 × 10.4

ii: 哺乳綱 MAMMALIA

1. ネズミ科の一種 *Muridae* gen. et sp. indet.

頭骨2点、右下顎骨3点、左下顎骨1点、左寛骨1点出土、本遺跡出土では唯一の哺乳類である。歯と顎骨、頭蓋骨はエゾヤチネズミに近似するがやや大型である点、口蓋骨の形態がやや大型である点、口蓋骨の形態がやや異なる点などから別種のものと思われ、ここではネズミ科の一種として扱った。

種不明

腹足綱3点(いずれも種は異なる)、魚類20点(ほとんどが脊椎骨で、7種に分けられる)が出土している。これらは、破砕が著しいもの、筆者の現生標本にない種であり、種同定には到らなかった。

※種名に関しては学研生物図鑑を参考にした。

まとめ

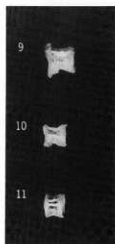
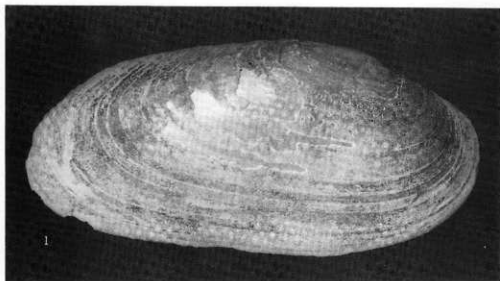
○沖I遺跡出土動物遺存体において、同定しえたものは、軟体動物5種、節足動物1種、魚類6種、哺乳類1種である。出土点数が少ないため、本遺跡における動物遺存体の特徴を把握する

には至らなかったが、貝、魚類において海産種が多く出土しており、遺跡の立地条件から考えて注目に値する。

○本遺跡における動物遺存体は灰層からの出土であるため、ほとんどが焼成を受け、白色化及び灰色化し、破砕が著しかった。

○魚類においては出土部位のほとんどが脊椎骨であり、頭部を構成する内臓骨等の出土は非常に少なかった。

※標本の不備などから種不明のものに関しては、国立歴史民俗博物館西本豊弘氏のご教示を受けた。



- 1 カワシンジュガイ (R), 2 カレイ科の一種 (腹椎骨), 3 カレイ科の一種 (歯骨L), 4 カレイ科の一種 (尾椎骨), 5 マダラ (腹椎骨), 6 タマキビガイ, 7 マイワシ (腹椎骨), 8 マイワシ (尾椎骨), 9・10 ニシン科の一種 (尾椎骨), 11 ニシン科の一種 (腹椎骨), 12 ネズミ科の一種 (頭骨、顎骨)

沖 I 遺跡出土動物遺存体

付編 2

沖 I 遺跡出土種子同定 (1)

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は No.1~5 の 5 点で、BIII区・CIII区から検出・採取されたもので (表 1)、いずれも中世のものとして推定されている。No.1~4 は発掘調査時に洗別された炭化種子であり、No.5 は No.1 と同じ遺構から採取された土壌で、約 940 g (風乾重) あった。

表 1 沖 I 遺跡試料の採取遺構など

試料番号	採取遺構など	試料番号	採取遺構など
1	BIII区 01 住炉焼土	4	CIII区混合
2	CIII区 01 住	5	BIII区 01 住焼土
3	CIII区灰溜 Pit		

2. 方法

No.1~4 は実体顕微鏡下で同定・計数した。No.5 は試料を篩別、1 mm 以上の残滓を実体顕微鏡下で観察し、種実を拾い出し同定・計数した。同時に種実の拡大写真図版 (図版 I) も作成した。

3. 結果

同定された種実とその主な生育地・生育形 (表 1)、個体数 (表 2) を一覧表で示した。

表 1 沖 I 遺跡試料中から同定された種実とその主な生育形

科 名	種 名	主な生育形*
GRAMINEAE (イネ科)	<u>Oryza sativa</u> (イネ)	栽培種
	<u>Hordeum/Triticum</u> spp. (ムギ類)**	栽培種

MORACEAE (クワ科)	<u>Humulus scandens</u> (カナムグラ)	1・藤・草
POLYGONACEAE (タデ科)	<u>Polygonum</u> spp. (タデ属の一種)	草
CHENOPODIACEAE (アカザ科)	<u>Chenopodium album</u> (シロザ)	1・草
ROSACEAE (バラ科)	<u>Prunus persica</u> (モモ)	栽培種
	<u>P. salicina</u> (スモモ)	栽培種
LEGUMINOSAE (マメ科)	<u>Leguminosae</u> spp. (マメ科の一種)	
VITIDACEAE (ブドウ科)	<u>Vitis</u> sp. (ブドウ属の一種)	藤

・：1；1年生、藤；つる性、草；草本。

・・：ほとんどがオオムギ属 (Hordeum) のようであるが、コムギ属 (Triticum) も混じっている可能性もありムギ類とした。

表 2 沖 I 遺跡試料中から同定された種実とその個体数。

種類/試料番号	1	2	3	4	5
イネ	7	23	6		1
ムギ類	249	4	21		24
カナムグラ	1		1		2
タデ属	2			10	2
シロザ				2	
モモ			14		
スモモ			1		
マメ科	1	14	76		
ブドウ属			1		
その他	26	10	20	39	55
合 計	286	51	140	51	84

沖 I 遺跡出土種子同定 (2)

1. 試料

試料は、沖 I 遺跡 CII 02 住炉 (中世) より得られたもので、すべて炭化している。中には発泡状態の個体も存在する。発泡していない個体では、外形が比較的良好状態で観察でき、保存状態は比較的良好である。同定した炭化種子はビニール袋に、各々和名を記し分類しておいた。但しその個体粒数については破片も含む場合があり、正確な個体数を表していない。

2. 方法

種子同定方法は、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて観察した。また、写真図版 (図版 II・III) も作製した。

3. 結果・考察

本遺跡から得られた大型植物遺体は、マメ類 A・B・C、オナモミ、イネ、アワ、コムギ、不明 A・B である。

栽培植物はマメ類、イネ、アワ、コムギであり、これらは遺跡付近で栽培したものと考えられる。

オナモミは人里付近に生育する雑草で、人によって持ち込まれてきたものと考えられる。不明 A とした個体は木本植物の芽であり、付近に生育していたものと考えられる。

なお、すべての個体が炭化し炉からの産出であるが、これらの組成から食糧となる栽培植物が多く、人為的な意図が反映されていると考えられる。とくにマメ類が多く、その種類数は A・B・C とサイズで分類した。分類の違いは種の違いか成長過程の、または熟編成による違いかは不明であるが、当時の栽培植物の様相を知る手掛かりのひとつになると考えられる。

以下に各種類の特徴を述べる。

・マメ類 A (Leguminosae A) 種子 (16 粒) (図版 II の 1・2)

炭化した種子(子葉)が得られた。側面観は楕円形、上面観は楕円形の俵型。長さ 4.5 mm 程度、幅 3 mm 程度、厚さ 3 mm 程度。マメ類特有の「へそ」が存在する。

マメ類 B・C としたものと比べると、一番小型のグループをマメ類 A とした。

・マメ類 B (Leguminosae B) 種子 (18 粒) (図版 II の 3・4)

炭化した種子(子葉)が得られた。側面観は楕円形、上面観は楕円形の俵型。長さ 5.5 mm 程度、幅 3.2 mm 程度、厚さ 3 mm 程度。「へそ」の長さは種子の長さの約半分。

マメ類 A よりもひとまわり大型であるが、マメ類 C よりも小型である。

・マメ類 C (*Leguminosae* C) 種子 (22 粒) (図版 II の 5)

炭化した種子 (子葉) が得られた。発泡している固体もあり、保存状態は良いものだけではない。長さ 7 mm 程度。マメ類 A・B より大型である。

なお、マメ類 C とした大型種子の中でも 2 グループに分けられる可能性もあるが、表面の形状が不明確なため、1 グループにしておく。

・オオムギ (*Hordeum vulgare* subsp. *hexastichon* ASCHERSON) 胚乳 (17 粒)

(図版 II の 7・8)

胚乳は炭化し、黒色。細長い楕円体状。長さ 4~5 mm 程度、径 2~2.5 mm 程度。一端に胚が位置する凹部が存在し、逆に面に一条の溝が存在する。

・イネ (*Oryza sativa* LINNE) 胚乳 (9 粒) (図版 II の 9・10)

胚乳は炭化し、黒色。やや扁平な楕円体。長さ 4.5 mm 程度。一端に胚が位置する部位が存在する。

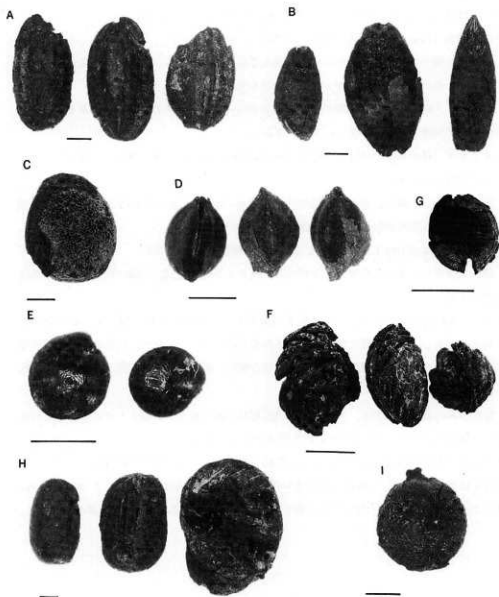
・アワ (*Setaria italica* BEAUVOIS) 穎果 (38 粒) (図版 II の 11~13、図版 III の 18・19)

穎果は炭化し、黒色。穎に包まれる固体の側面観はさかさ心臟形。胚乳のみの個体の側面観はほぼ円形に近い心臟形、またはさかさ心臟形、胚が位置する凹部が存在する。胚乳の長さ 1.4 mm 程度。

胚乳のみの炭化状態では、アワとヒエの区別が困難であるが、穎とともに産出しているため (図版 2 の 11)、ここでは他の胚乳個体をアワとする。

・コムギ (*Triticum aestivum* LINNE) 胚乳 (20 粒) (図版 II の 14・15)

胚乳は炭化し、黒色。比較的保存が良い個体で楕円体、両端は円頭。長さ 3~4 mm 程度、径 2.2~2.5 mm 程度。一端に胚が位置する凹部が存在し、逆に面に一条の溝が存在する。



A: *Oryza sativa* No. 2 B: *Hordeum/Triticum* spp. No. 1
 C: *Humulus scandens* No. 1 D: *Polygonum* spp. No. 4
 E: *Chenopodium album* No. 4 F: *Prunus persica* No. 3
 G: *P. salicina* No. 3 H: Leguminosae spp. No. 3
 I: *Vitis* sp. No. 3
 スケール: F・Gは 1 cm, その他は 1 mm.

図版 I 沖 I 遺跡出土種子 (1)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



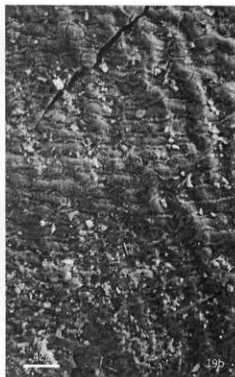
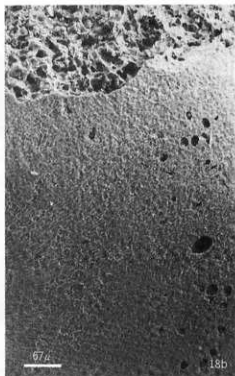
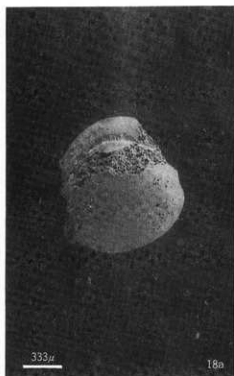
16



17

- 1・2. マメ類A (×5),
 3・4. マメ類B (×5),
 5. マメ類C (×5),
 6. オナモミ (×3.6)
 7・8. オオムギ (×5),
 9・10. イネ (×5),
 11~13. アワ (×10),
 14・15. コムギ (×5)
 16. 不明A (×7.5),
 17. 不明B (×7.5)

図版II 沖I遺跡出土種子(2)



図版Ⅲ 沖 I 遺跡出土種子 (3)

沖 I 遺跡の BIII01、CIII01、CII02 の各住居跡の炉から採取された灰について植物珪酸体分析、灰像分析を行い次のような結果を得た。

1. 方法

各試料とも葉さじ 1 杯量をトルビーカーにとり、有機物分解、脱鉄、篩と沈降法での 10-100 μm 粒径画分の分離、乾燥、プレパラート作製、検鏡の手順で分析をすすめた。分析試料は、いずれも、通常の土壌試料とは異なり、植物珪酸体の他に珪化組織片を多数含有していた。植物珪酸体については従前の分類に従い同定し組成を求めた。一方、珪化組織片については、給源植物(群)、給源組織と関連づけて区分し、便宜的に 10 群に分けて同定し組成を求めた。なお、多くの植物分類群に共通すると推定された組織片については、鏡取りから除外した。図版に検出されたいくつかの植物珪酸体、珪化組織片の顕微鏡写真を示した。

2. 結果

「BIII01 住居跡、炉の灰」

植物珪酸体：大部分がイネ科起源のものと判断された。大型珪酸体では、棒状珪酸体が優勢であった。ファン型珪酸体はすべて非タケ亜科起源のもので、そのうち 25% を越えるものがイネ様のものと判断された。ポイント型は 4% の検出率を示した。小型珪酸体では、キビ型が優勢で、次いでウシノケグサ型とイネ型がほぼ同じ位検出された。タケ型、ヒゲシバ型は、それぞれ 1 個検出されたにすぎない。その他の珪酸体のうち、ムギ類起源の珪酸体（図版 I の 3・4）が多数検出され植物珪酸体鏡取り総数の 30% 近くを占めた。

珪化組織片：珪化組織片はほとんどムギ様のもの（図版 I の 6・7、図版 II の 1-4）で占められた。葉部組織片では、イネ型珪酸体を含有するもの（図版 II の 6・7）が、キビ型珪酸体を含有するもの（図版 II の 5）、ウシノケグサ型珪酸体を含有するもの（図版 II の 8）より優勢であった。弱珪化毛片（図版 I の 10）、イボ状突起を有する組織片もかなり検出された。また、樹木の葉部表皮組織に類似した構造をもつ珪化組織片（図版 I の 12）も少なからず検出された。

「CIII01 住居跡、炉の灰」

植物珪酸体：大部分がイネ科植物起源のものであった。大型珪酸体では、ファン型珪酸

表1 沖ノ遺跡の住居跡・炉の灰の植物珪酸体組成

試料	イネ科起源											その他 の 数					
	ファン型			棒状型			ポイント型			タケ型			ヒゲシバ型	キビ型	ウシノケグサ型	イネ型	未分類
	I	II	?	I	II	?	I	II	?								
BⅢ01住居跡・炉の灰	0	15 (14)	0	106	12	1	0	0	1	26	9	7	24	10 (9)	31.4 (28.6)	302	
CⅢ01住居跡・炉の灰	0	6 (13)	0	58	11	3	0	0	1	26	1	5	9	3 (2)	199		
CⅡ02住居跡・炉の灰	1	19 (13)	0	42	19	1	0	0	3	94	1	15	10 (9)	17.8 (13)	244		
	0.4	19.8 (4.9)		17.2	7.8	0.4			1.2	38.5	0.4	6.1	4.1	7.8 (4.9)			

各欄の上段は粒数、下段は百分率。

1) ()内はイネ科のもの、 2) ()内はムギ類起源

表2 沖ノ遺跡の住居跡・炉の灰の珪化組織片組成

試料	珪化組織片			葉部組織片			弱珪化毛片	イボ状突起を有する組織片	双葉部片	総数
	イネ様	キビ・ヒエ	ムギ様	イネ型珪酸体含有する	キビ型珪酸体含有する	ウシノケグサ型珪酸体含有する				
BⅢ01住居跡・炉の灰	0	1	20	13	4	1	35	33	19	126
CⅢ01住居跡・炉の灰		0.8	15.9	10.3	3.2	0.8	27.8	26.2	15.1	
CⅡ02住居跡・炉の灰	31	64	9	33	29	0	9	25	0	200
	15.5	32	4.5	16.5	14.5		4.5	12.5		
	3	5	2	48	39	0	2	52	0	151
	2.0	3.3	1.3	31.8	25.8		1.3	34.4		

各欄の上段は粒数、下段は百分率

体と棒状型珪酸体が同じ位検出された。ファン型はすべて非タケ亜科起源のもので、そのうち40%を超えるものがイネ科のもの(図版Ⅰの2)と判断された。ポイント型珪酸体の検出率は、両者に比べ明らかに小さかった。小型珪酸体では、キビ型が最も多く、次いでイネ型、タケ型の順であった。ウシノケグサ型、ヒゲシバ型は、それぞれ1個検出されたにすぎない。その他の珪酸体のうち、ムギ類起源の植物珪酸体が2%検出された。

珪化組織片: 葉組織片では、キビ・ヒエ・アワ様のもの(図版Ⅰの5)が最も多く、次いで、イネ科(図版Ⅰの8)、ムギ様の順であった。葉部組織片では、イネ型珪酸体含有するもの、キビ型珪酸体含有するものが、ほぼ同じ位検出されたが、ウシノケグサ型珪酸体含有するものは検出されなかった。イボ状突起を有する組織片(図版Ⅰの11)は、かなり検出されたが、弱珪化毛片はさほど検出されなかった。

「CⅡ02住居跡、炉の灰」

植物珪酸体: 大部分がイネ科起源のもので占められた。大型珪酸体では、棒状型珪酸体とファン型珪酸体と同じ位検出された。ファン型は、ほとんどが非タケ亜科起源のもので、そのうち30%がイネ科のもの(図版Ⅰの2)と判断された。ポイント型は約8%検出された。小型珪酸体では、キビ型が極めて優勢で、次いでイネ型、ヒゲシバ型の順であった。ウシノケグサ型、タケ型は、それぞれ1個検出されたにすぎない。その他の珪酸体で、ムギ類起源の珪酸体

が5%検出された。

珪化組織片：顆粒組織片はあまり検出されなかった。葉部組織片では、イネ型珪酸体を含有するもの、キビ型珪酸体を含有するものが同じ位検出され、ウシノケグサ型珪酸体を含有するものは検出されなかった。イボ状突起を有する組織片は、かなり検出されたが、弱珪化毛片はあまり検出されなかった。

3. 考察

いずれの試料もムギ類、イネ、キビ・ヒエ・アワ類の灰化残渣から構成されていた。しかし、BIII01 住居跡・炉の灰がムギ類起源のものをより多く含有しているのに対し、CIII01 住居跡・炉の灰、CII02 住居跡・炉の灰はイネおよびキビ・ヒエ・アワ類起源の残渣が卓越していて、両者間には明らかな差が認められた。炉残存炭化種子の分析においても、BIII01 住居跡・炉の試料からムギ類種子が相対的に多く検出されており、植物珪酸体、珪化組織片の各組成と調和する結果が得られている。このような組成差が、炉で灰化した植物体構成の違いを反映していることは間違いないところである。しかし、その違いが何を意味するのかを考察することは住居跡の性格が今一つ明確でないことから、現状では困難である。

本分析にあたり、近藤謙三（帯広畜産大学）には、植物標本を分けていただき、また走査電子顕微鏡写真を撮影していただいた。井上克弘（岩手大学）、斉藤雅典（東北農試）、鈴木良則（岩手農試）の各氏には植物標本の収集に際してお世話になった。記して感謝の意を表する。

図版説明

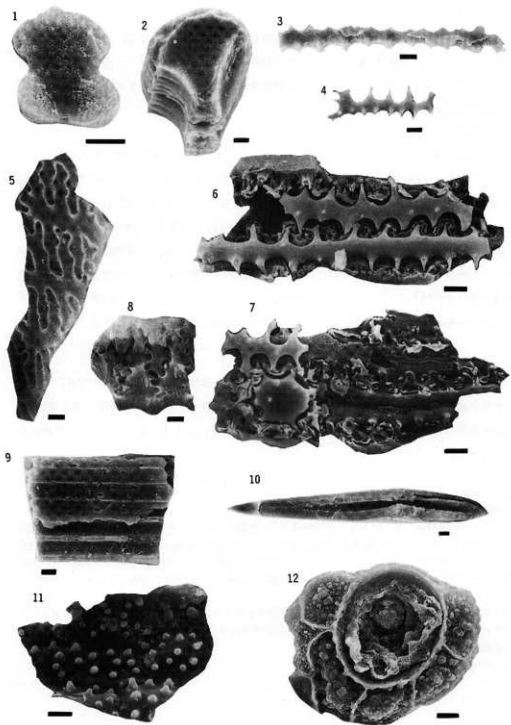
図版 I スケールは 5 μm

1 イネ型珪酸体、2 ファンII型珪酸体（イネ起源）、3・4 ムギ類顆粒源珪酸体、5 ヒエ類様珪化組織片、6・7 ムギ類顆粒様珪化組織片、8 イネ類様珪化組織片、9 イネ科植物基本組織珪化片、10 弱珪化毛片、11 イボ状突起を有する珪化組織片、12 双子葉植物珪化葉部片、1・3・4・6・7・9・10・12 は BIII01 住居跡・炉の灰より分離、2・5・8・11 は CIII01 住居跡・炉の灰より分離

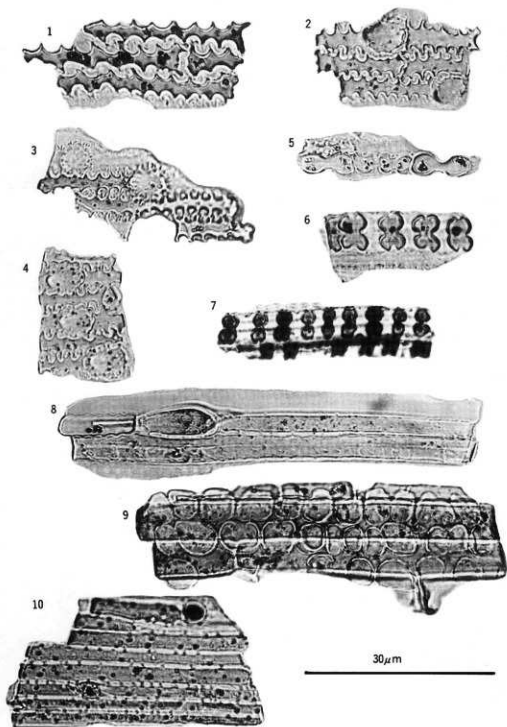
図版 II

1・2・3・4 ムギ類顆粒様珪化組織片、5 キビ型珪酸体を有する珪化葉部組織片、6・7 イネ型珪酸体を有する珪化葉部組織片、8 ウシノケグサ型珪酸体を有する珪化葉部組織片、9・10 イネ科植物基本組織珪化片

いずれも BIII01 住居跡・炉の灰より分離

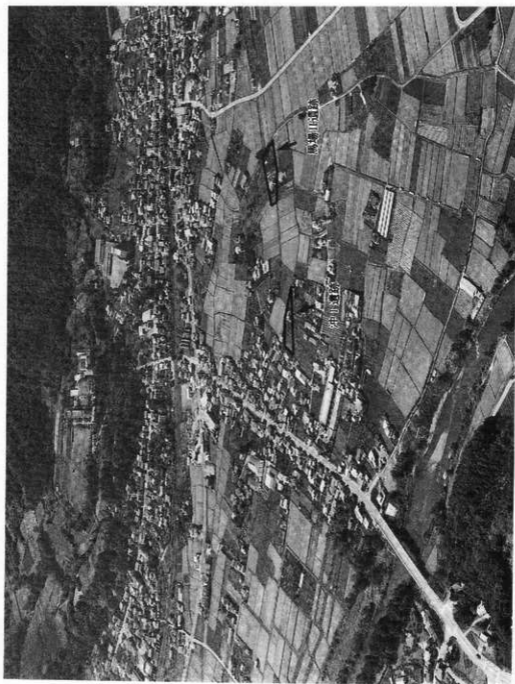


図版 I 沖 I 遺跡出土植物珪酸体，珪化組織片の走査型電子顕微鏡写真

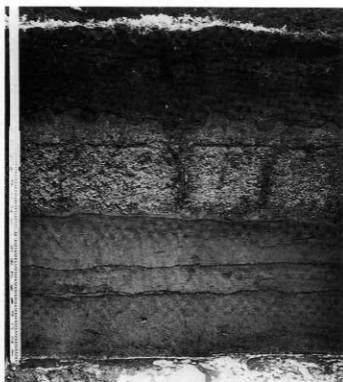


図版II 沖I遺跡出土植物珪酸体、珪化組織片の光学顕微鏡写真

写 真 图 版



図版 1 調査区空中写真

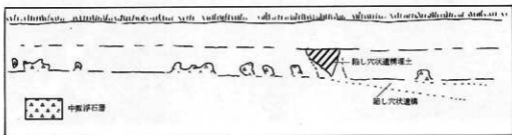


中瀬浮石層
約5000年前

南部浮石層
約9000年前

段丘構成層

表層地質断面 (II C区)

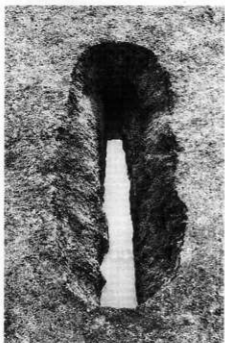
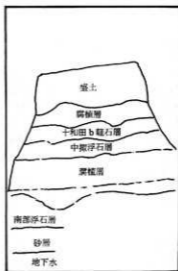


表層地質断面 (III B区)

図版 2 沖 I 遺跡・土層断面



表層地質断面



SI 001 陥し穴状遺構



SI 001 陥し穴状遺構検出状況



SI 001 陥し穴状遺構埋土

図版3 馬場II遺跡・土層断面、陥し穴状遺構

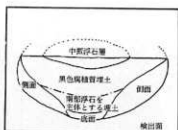
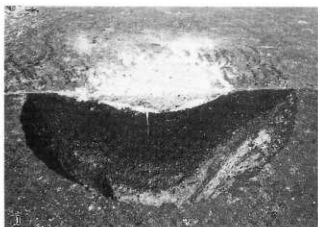
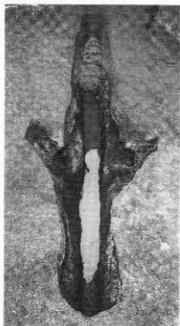


写真1の説明

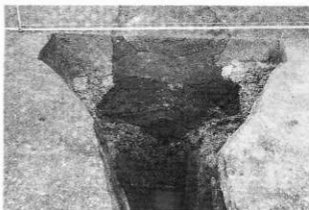


- 1 P 1 001陥し穴状構埋土断面
- 2 全景
- 3 逆茂木跡拡大
- 4 逆茂木跡断面

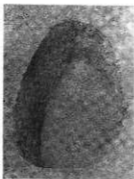
図版4 馬場II遺跡・陥し穴状遺構



Q11001 陥し穴状遺構埋土断面



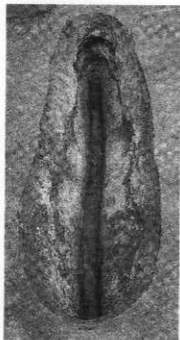
Q11001 陥し穴状遺構



Q1001 土坑



Q1001 土坑埋土断面

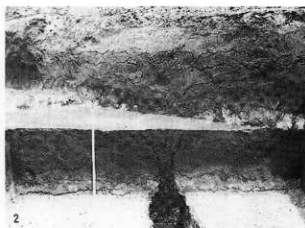
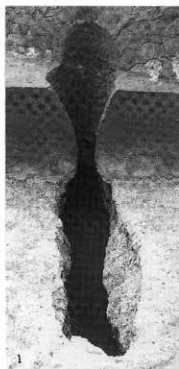


P11001陥し穴状遺構



P11001陥し穴埋土断面

図版 5 馬場II遺跡・陥し穴状遺構，土坑



- 1 QII002陷し穴状遺構
- 2 QII002陷し穴状遺構埋土断面、周辺土層
- 3 PII002陷し穴状遺構
- 4 PII002陷し穴状遺構埋土断面、周辺土層

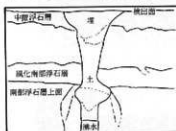
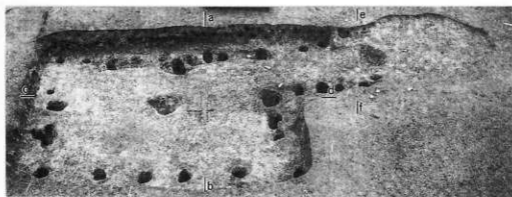


写真4の説明



図版6 馬場II遺跡・陷し穴状遺構



B III01住居跡



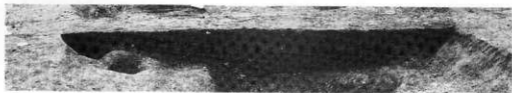
掘り方



埋土断面 (a-b)

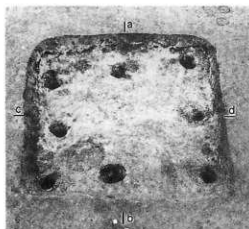


埋土断面 (c-d)



埋土断面 (f-e)

図版7 沖I遺跡・住居跡



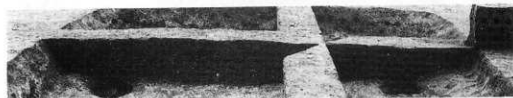
CIII01住居跡



握り方



埋土断面 (a-b)



埋土断面 (c-d)

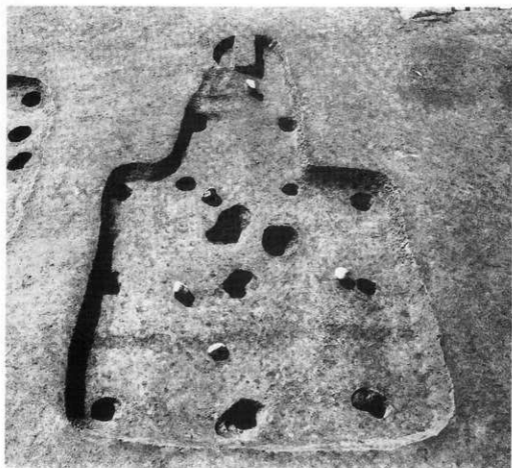


壁面に露出する水成堆積層

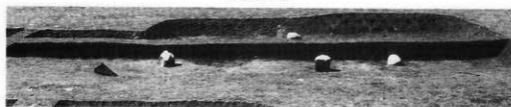


地床炉

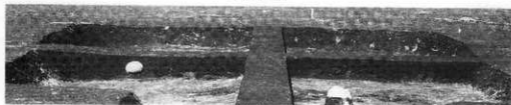
図版 8 沖 I 遺跡・住居跡



C II 01住居跡

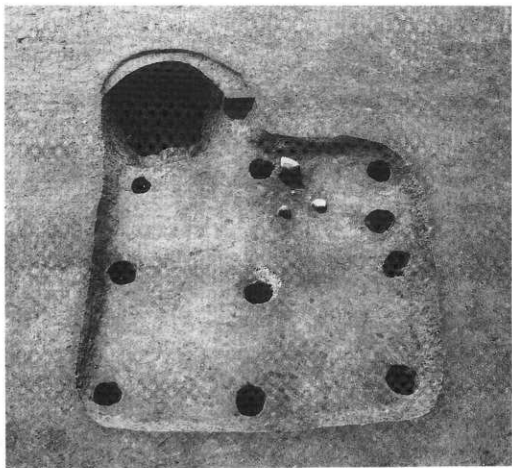


埋土 (SN)



埋土 (WE)

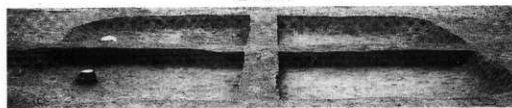
図版9 沖 I 遺跡・住居跡



C II 02住居跡

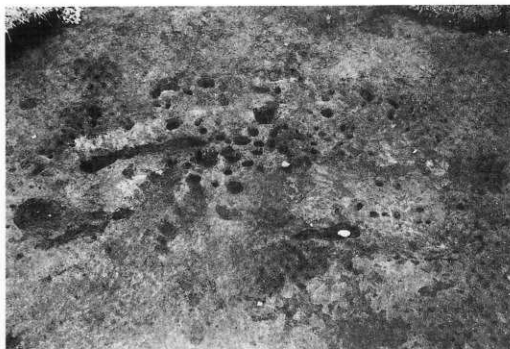


埋土 (EW)

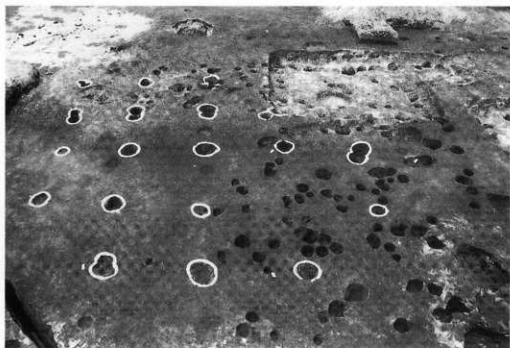


埋土 (SN)

図版10 沖 I 遺跡・住居跡

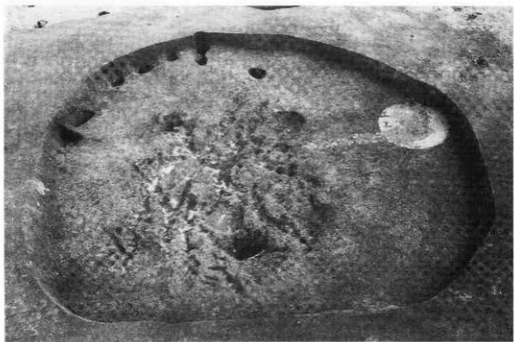


BII01 住居跡状遺構



BIII02 掘立柱建物跡（南側部分）

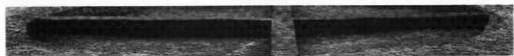
図版11 沖 I 遺跡・掘立柱建物跡，住居跡状遺構



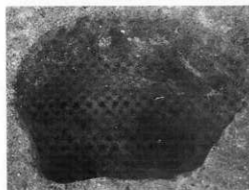
CII03 住居跡状遺構



CII03 住居跡状遺構埋土 (SN)



CII03 住居跡状遺構埋土 (WE)

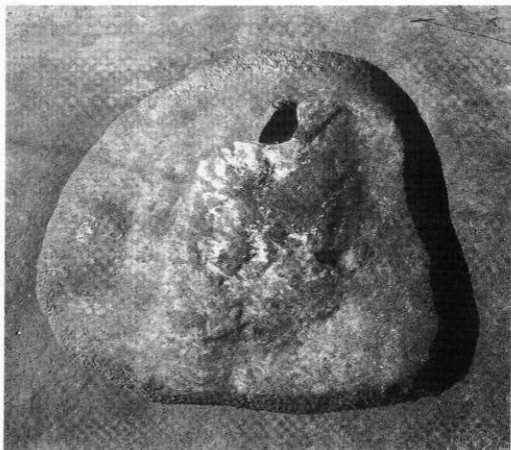


DII001 土坑

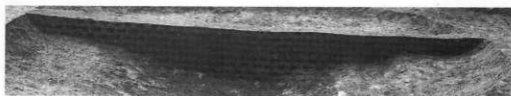


DII001 土坑埋土

図版12 沖 I 遺跡・住居跡状遺構, 土坑



DII01 住居跡状遺構

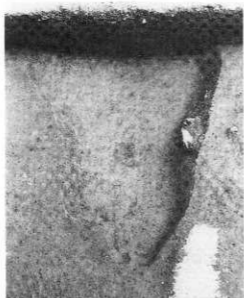


埋土断面 (SN)



埋土断面 (WE)

図版13 沖 I 遺跡・住居跡状遺構



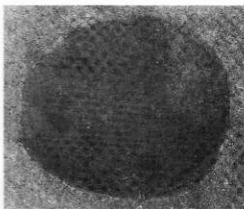
D II 02 住居跡状遺構



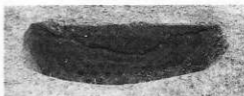
D II 02 住居跡状遺構埋土断面



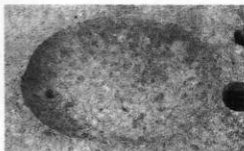
C II 001 土坑



C III 006 土坑



C III 006 埋土断面



C III 007a 土坑



C III 007a 土坑埋土断面



C II 001 土坑埋土断面

図版14 沖 I 遺跡・住居跡状遺構, 土坑



BIII004 陥し穴状遺構



BIII004 陥し穴埋土



BIII005 陥し穴埋土



BIII005 陥し穴状遺構



BII001 土坑



BIII002 土坑

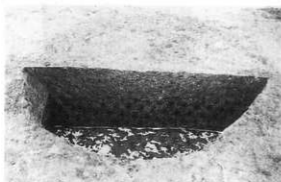


BII001 土坑埋土



BIII002 土坑埋土

図版15 沖I遺跡・陥し穴状遺構, 土坑



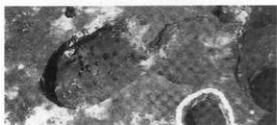
BIII003 井戸跡埋土



BIII003 井戸跡検出状況



CIII003・004 土坑(灰溜), CIII005 井戸跡検出状況



CIII003・004 土坑(灰溜)



CIII003・004 土坑(灰溜)埋土断面



CIII005 井戸跡

図版16 沖I遺跡・井戸跡、土坑



CIII001 土坑



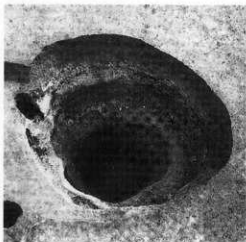
BIII001 土坑埋土断面



CIII001 土坑埋土断面



CIII002 烧土断面



CIII009 井戸跡



CIII009 井戸跡埋土上部



CIII009 井戸跡埋土下部

図版17 沖I遺跡・井戸跡、土坑



CIII007b 土坑



CIII007b 土坑埋土断面



CIII008 土坑



CIII008 土坑埋土断面



DIII004 土坑



DIII004 土坑埋土断面



DIII002 土坑



DIII002 土坑埋土断面



DIII003 土坑



DIII003 土坑埋土断面



DIII001 土坑



DIII001 埋土断面

圖版18 沖I遺跡・土坑



EI 001 溝



DI 001 溝



EI 001 溝埋土断面



DI 001 溝埋土断面

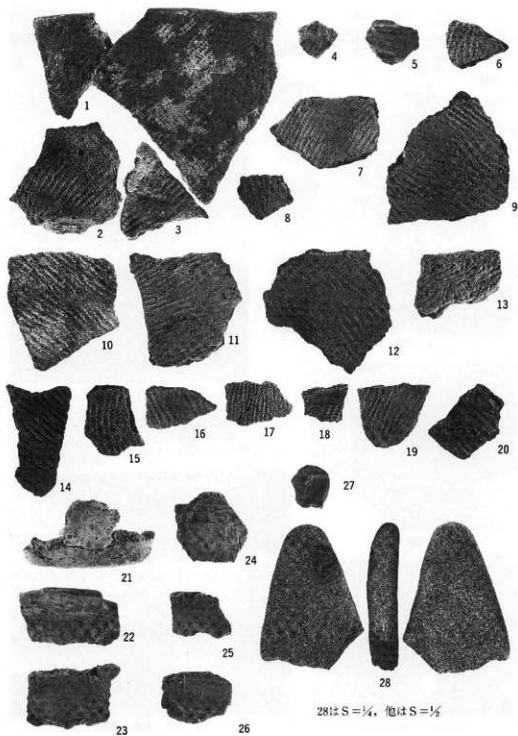


DI 001 溝埋土断面

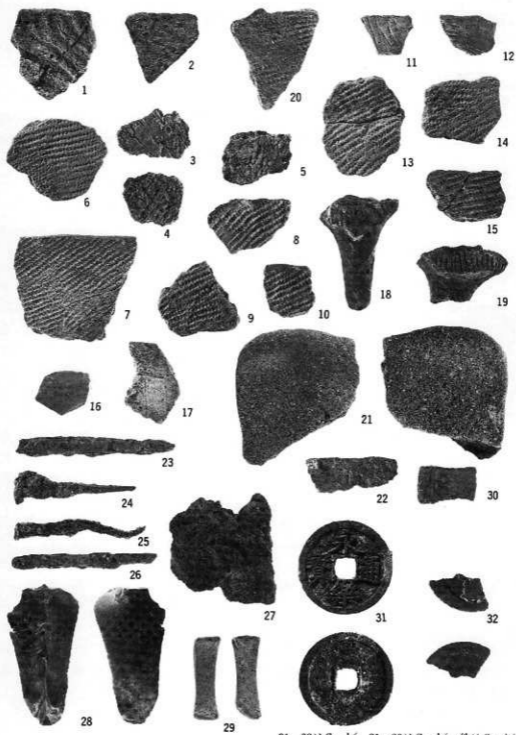


EI 001 溝埋土断面

圖版19 沖I遺跡・溝跡



図版20 馬場II遺跡・遺物



31, 32はS=1/4, 21, 29はS=1/2 他はS=1/2

図版21 沖I遺跡・遺物

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	小笠原 喜 一				
副 所 長	米 澤 康 雄				
(管 理 課)					
管理課長(兼)	米 澤 康 雄	嘱 託	吉 田 一 男		
課 長 補 佐	森 岡 陽 一	//	山 館 春 男		
主 事	阿 部 隆 広	運 転 技 術 士 員	佐 藤 春 男		
(調 査 課)					
調 査 課 長	昆 野 靖	文 化 財 門 調 査 員	佐 々 木 信 一		
課 長 補 佐	佐々木 嘉 直	//	小 原 上 修		
主 任 文 化 財 門 調 査 員	小 田 野 哲 憲	//	村 上 宗 孝		
//	三 浦 謙 一	//	酒 井 本 建 昭		
//	工 藤 利 幸	//	松 本 子 田 彦		
//	高 橋 与 右 門 進	//	金 濱 普 相		
//	平 井 川 良 重	//	及 阿 菊 池 川 雅		
//	中 村 川 重 敏	期 限 調 査 員	原 川 部 池 川 雅		
//	中 藤 村 敏 義	//	及 阿 菊 池 川 雅		
//	藤 高 橋 義 介	//	及 阿 菊 池 川 雅		
文 化 財 門 調 査 員	高 齋 藤 瀬 季 博	//	及 阿 菊 池 川 雅		
//	千 齋 藤 隆 幹	//	及 阿 菊 池 川 雅		
//	齋 藤 林 隆 幹	//	及 阿 菊 池 川 雅		
//	東 海 林 隆 幹	//	及 阿 菊 池 川 雅		
//	佐々木 村 均	//	及 阿 菊 池 川 雅		
//	川 村 貞 行	//	及 阿 菊 池 川 雅		
//	鈴 木 東 格	//	及 阿 菊 池 川 雅		
//	伊 遠 藤 邦 敏	//	及 阿 菊 池 川 雅		
//	齋 藤 神 敏	//	及 阿 菊 池 川 雅		
(資 料 課)					
資 料 課 長	高 橋 薫 夫				
主 任 文 化 財 門 調 査 員	田 鎖 壽				

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第152集

馬場Ⅱ遺跡・沖Ⅰ遺跡発掘調査報告書

国道4号金田一バイパス関連遺跡発掘調査

印刷 平成2年8月25日

発行 平成2年8月31日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 紫波郡南村大字下飯岡11字高風敷185

電話 (0196) 38-9001~2

印刷 山口北州印刷株式会社

〒020-01 盛岡市青山四丁目10-5

電話 (0196) 41-0585